

仙台市文化財調査報告書第52集

南 小 泉 遺 跡

都市計画街路建設工事関係第2次調査報告

昭和58年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第52集

南 小 泉 遺 跡

都市計画街路建設工事関係第2次調査報告

昭和58年3月

仙台市教育委員会

序 文

昨年度から実施している都市計画街路、川内・南小泉線建設工事ともなう発掘調査は、今年度は仙台バイパスと接続する付近の調査を行いました。予定では、昨年度調査を行った第1次調査区北側の部分も行うことになっていましたが、いろいろな問題があり、来年度に持ち越しになりました。

昨年度調査を実施したところは、過去の分布調査から、遺構の濃密なところと推定されていましたが、今年度調査箇所は、南小泉遺跡としては、中央部南端にあたり、昨年度の調査結果とも合せてみると、時期としては平安時代以降で、しかも、遺構数は少ないのではないかと予想されておりました。その結果は以下にまとめて報告してありますので、是非ご一読の上、ご批評下さい。前述しましたように、調査が来年度まで伸びたことにより、当都市計画街路建設に伴う調査の細部にわたる分類、考察も、来年度の調査報告書中で扱いたいと思います。

さて、昨年度実施した、この第1次調査以来、南小泉遺跡内での調査は、今回の第2次調査を含めて、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会で4ヶ所で開催しており、当遺跡の内容が序々に明らかになりつつあります。一方、このような実態は、我々、文化財保護行政にたずさわっている者にとりましては、憂うべき問題でもあります。遠見塚古墳を含めて、この一帯の保存、保護を考える場合、今をにおいては、その時期を逸すと考えられます。このことをふまえて、仙台市の都市開発と自然環境の調和という観点からも、これからも努力してまいる所存であります。

最後になりましたが、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

昭和58年3月

仙台市教育委員会
教育長 藤井 黎

例 言

1. 本書は都市計画街路、川内・南小泉線建設工事に先行する第2次調査の報告書である。
2. 内容は事実報告に主力をおき、考察は若干である。次年度に第3次調査を予定しており、そのおりに3年間の資料に基づき、分類、考察したい。
3. 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1:25,000仙台東南部地形図である。
4. 土層、遺物の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人・日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖を使用した。
5. 本書の原稿執筆担当は、目次に示したとおりである。なお編集は工藤が担当した。
6. 本書作成にともなう図面、遺物整理は「Ⅲ、調査要項」に記載してある整理参加者全員で行った。
7. 遺物の写真撮影は、小島真由美が担当した。
8. 内黒土師器は、その実測図にスクリーン-tonを貼って表現した。
9. 「付1」の三辻利一氏の胎土分析に使用した南小泉遺跡の資料は、昨年度、第1次調査のものである。
10. 磁北方向は真北に対して西偏7°0'である。

目 次

序文	
例言	
I. はじめに	結城慎一 1
II. 調査要項	工藤哲司 1
III. 遺跡の位置と環境	◇ 4
IV. 基本層位	◇ 4
V. 発見遺構と遺物	◇ 8
1. 住居跡	◇ 11
2. 土壇	◇ 17
3. 小溝状遺構	◇ 25
4. ビット	◇ 30
5. 性格不明遺構	◇ 31
6. 溝跡	◇ 34
VI. 遺物・遺構の総括	◇ 50
1. 遺物の総括	◇ 50
2. 遺構の総括	◇ 56
VII. まとめ	◇ 61
註記	
写真図版	66
付1. 仙台市周辺の窯跡および遺跡出土土器の胎土分析	三辻利一 77
付2. 胎土分析結果について	結城慎一 82

I. はじめに

昨年度からはじまった都市計画街路、川内・南小泉線の調査は、今年度は、仙台バイパス接続点付近、対象面積約1000㎡のうち約550㎡を調査した。当市で把握している南小泉遺跡のほぼ中央部南端に当たる位置である。

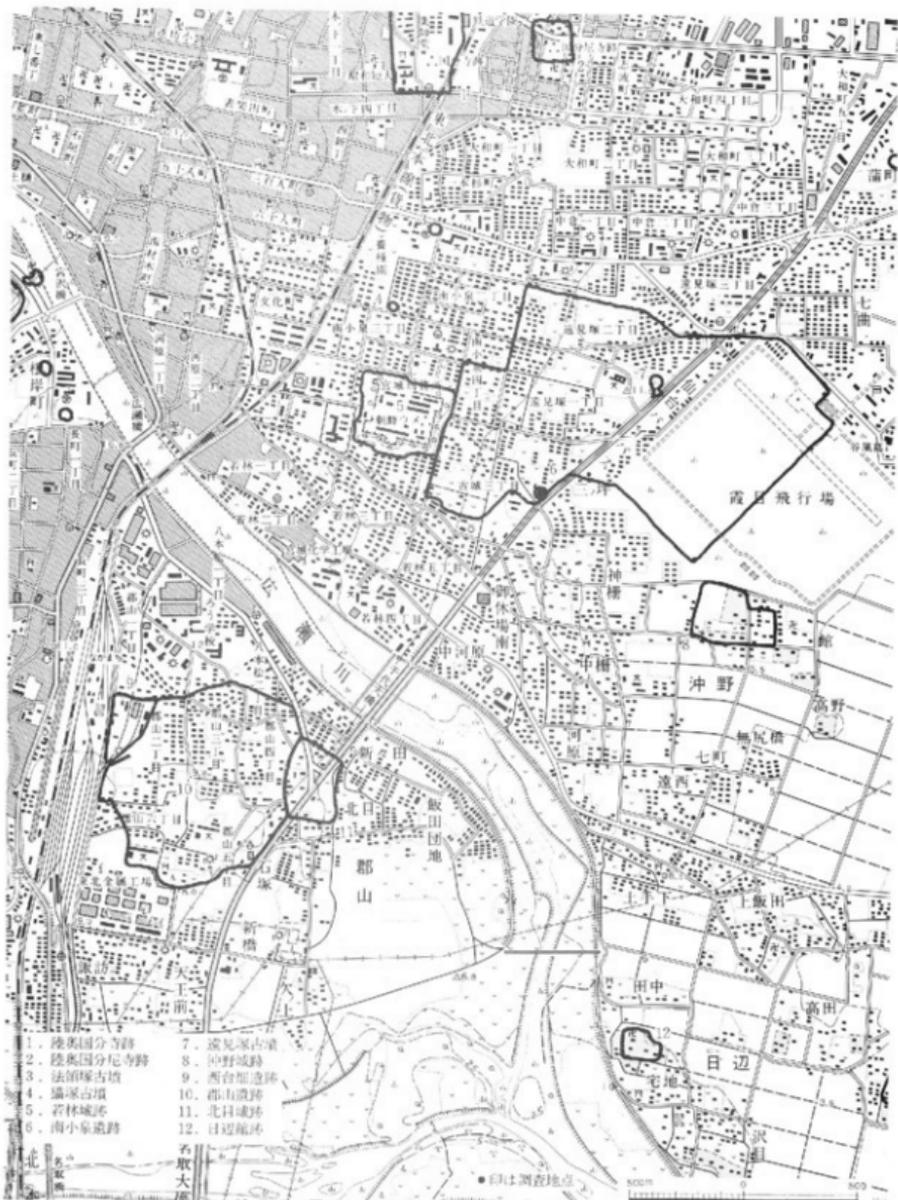
はじめに、昨年度、図上で設定したように、計画街路中心杭No. 0～No. 5の間のⅠ区に、現場で調査範囲として縄張りしたグリッドは4-c～f、5-c～f、6-c、d、7-c、d南半であり、第3次調査区ということになる。^(注)

当初は、昨年度調査を実施したⅢ区の第1次調査区北側の畑地にも調査区を設定することになっていたのであるが、用地買収の遅れにより、来年度にその部分の調査を延期することになった。

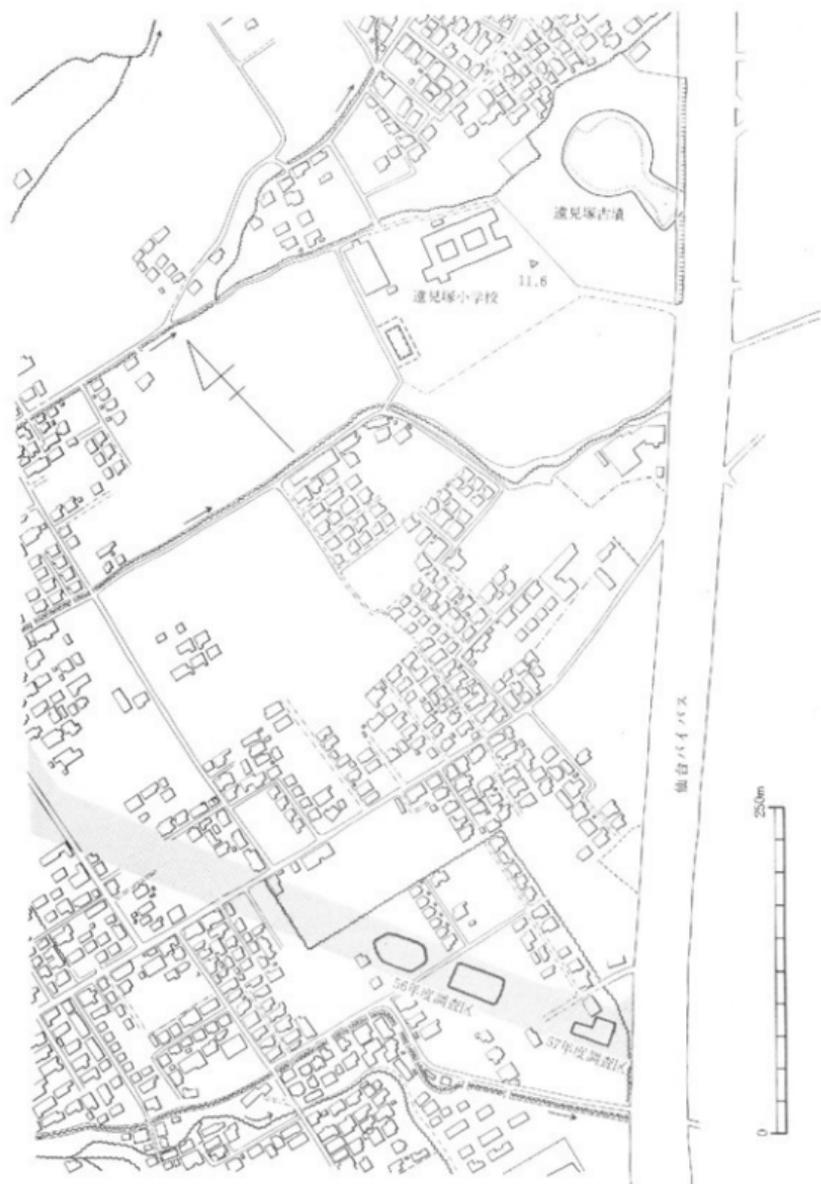
註 仙台市教育委員会「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書第35集(1982・3)のP5参照。

II. 調査要項

遺構の名称	南小泉遺跡(仙台市文化財登録番号C-102)
調査地点	仙台市古城三丁目
調査面積	約550㎡(対象面積約1000㎡)
調査期間	昭和57年6月22日～8月12日(延38日)
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係 主事 結城慎一、工藤哲司
調査参加者	〈現地調査〉 吉田俊一、菅野三郎、黒滝ふくえ、鈴木悦子、村上まつえ、渡辺みつゑ、芦野ヒデ子、兼子ミヨ子、佐々木由紀、松本寿一、只野宗一、佐藤和子、佐藤愛子 〈現地調査～整理〉 小林広美、赤間郁子、神尾恵美子、神尾紀以子、渡辺紀雄、熊谷峯子 〈整理〉 荒井 格、菊地雅之、相沢尚子



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 発掘調査区とその周辺

Ⅲ. 遺跡の位置と環境

南小泉遺跡は仙台平野の北部に位置し、国鉄仙台駅の南東約3.5kmの所にある。遺跡は広瀬川北岸に発達した自然堤防上に立地している。沖積平野にあっては、その奥部にあたる。遺跡の標高は11m前後であるが、自然堤防の発達状況の差異や後背湿地となっている所もあり、緩やかな起伏が認められる。

遺跡の範囲は、東西約1600m、南北約900mにも及び、仙台市内では最大規模の遺跡となっている。遺跡が残っているのは弥生時代の中頃からで、弥生時代の遺構は遺跡の東部を中心としている。その後、古墳時代から平安時代まで各時期の古代集落が営まれている。古墳時代中期には、遺跡の中心部に東北地方第3位の規模を有する主軸長110mの前方後円墳である遠見塚古墳が築かれている。

中世から近世については、陶磁器の採集や、この時期と考えられる溝跡、墓墳等の発見はあるが、古代に比べるとさらに不明な点が多い。

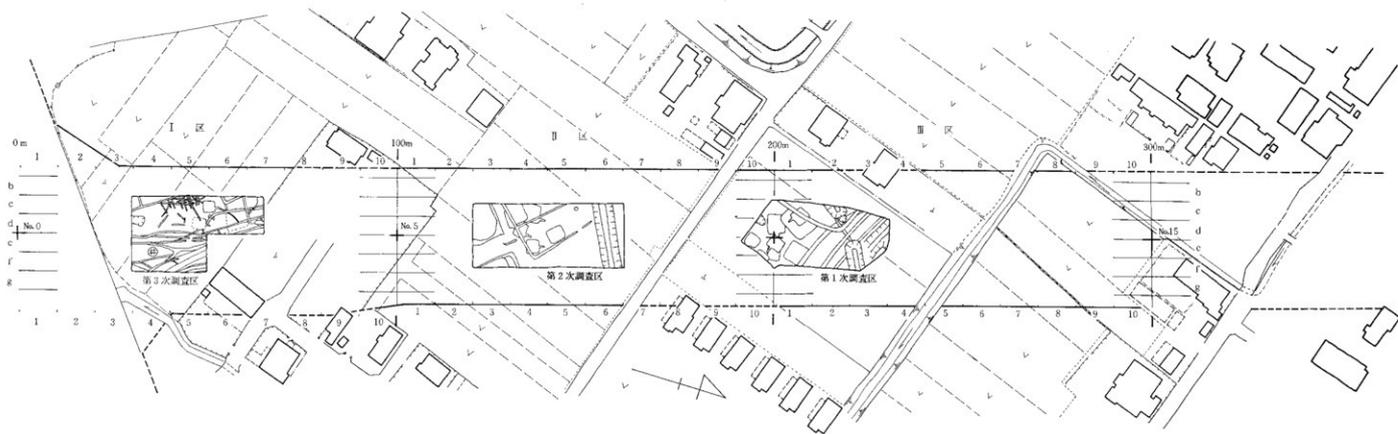
南小泉遺跡の周辺には、他にも多くの遺跡が存在しており、弥生時代としては西台畑遺跡があり、古墳時代としては南小泉遺跡の西方に、法願塚古墳や猫塚古墳がある。歴史時代になると賀城以前の官衙跡と考えられる郡山遺跡や陸奥国分寺、同尼寺跡が見られるようになり、仙台平野の中心的地区になってくる。さらに、中世から近世初頭にかけては、北目城や若林城、また沖野城が築かれ、古来この地域は歴史の足跡の絶えることがなかった。

同遺跡周辺は、近年まで仙台近郊の田園地帯となっていたが、最近では急速に宅地化が進行して、田畑は年々減少している。このまま宅地化が進行すれば、南小泉遺跡として残るのは、史跡指定された遠見塚古墳と、霞ノ目飛行場地内だけとなる恐れがある。

Ⅳ. 基本層位

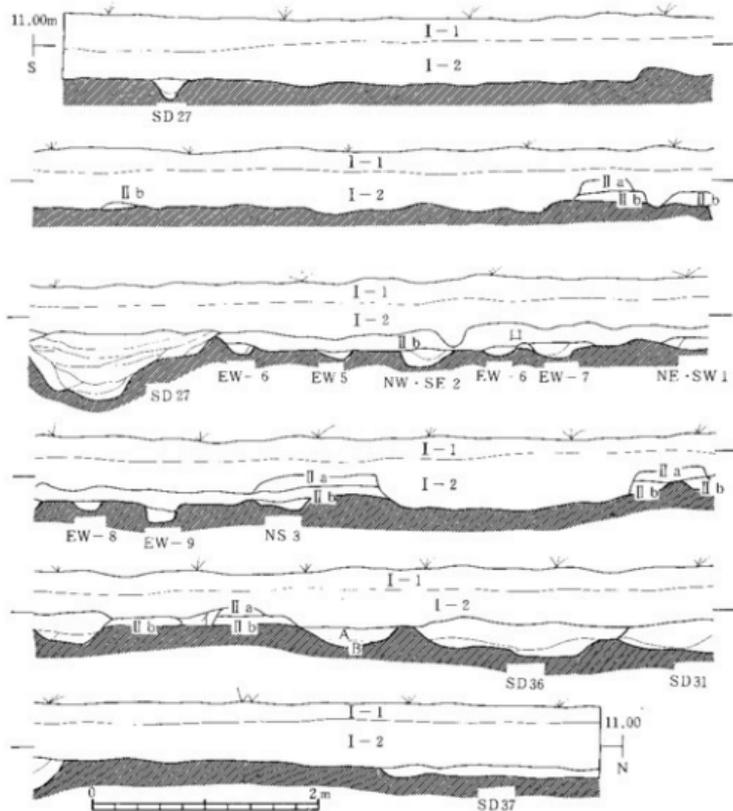
I層 畑の耕作土で60～120cmあり、上下2層に分けられる。上部のI-1層は、にぶい黄褐色シルトからなる現耕作土層で、下部のI-2層は、にぶい黄褐色砂質シルトからなる天地がえしによる耕作土層である。調査区の北西部には、I-2層の下に更に旧水田と考えられるグライ層とその底面に酸化鉄を多量に含む層も認められた。

II層 天地がえしの比較的浅い所では、部分的にやや黒味を帯びた少量の遺物を含む層が10～20cmの厚さに検出された。この層も上下に2分される。上部は褐色を呈するシルト層で、下部はにぶい黄褐色を呈している。この層の上面では数個のピットが検出されたが、他の大部分の遺構は、この層を除去した後に検出されている。



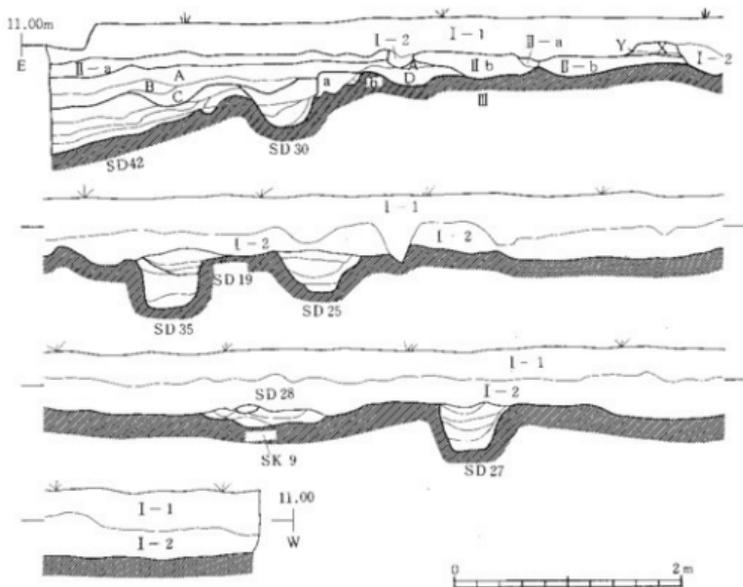
第3図 調査区・グリッド配置図

Ⅲ層 この層の上面において大部分の遺構が検出された。部分的に、あるいは深さによって土色、土質は多少異なるが、この地区の地山となっており、層中からの遺物の出土はない。



層位	土色	土質	その他
Ⅱ-1	10Y R 5/ に近い黄褐色	シルト	しまりなし・締り土と思われる
Ⅱ-2	10Y R 5/ に近い黄褐色	砂質シルト	粘性・しまりやや有り
Ⅱ-a	10Y R 5/ 褐色	シルト	しまり若干有り
Ⅱ-b	10Y R 5/ に近い黄褐色	シルト	粘性・しまりやや有り
Ⅲ	10Y R 5/ に近い黄褐色	シルト	粘性若干有り 地山
A	10Y R 5/ 黒褐色	粘土質シルト	粘性・しまりやや有り
B	10Y R 5/ 暗褐色	粘土質シルト	粘性・しまりやや有り
イ	10Y R 5/ 暗褐色	シルト	粘性・しまりやや有り
ロ	10Y R 5/ 暗褐色	粘土質シルト	粘性・しまり有り

第4図 調査区西壘土層断面図

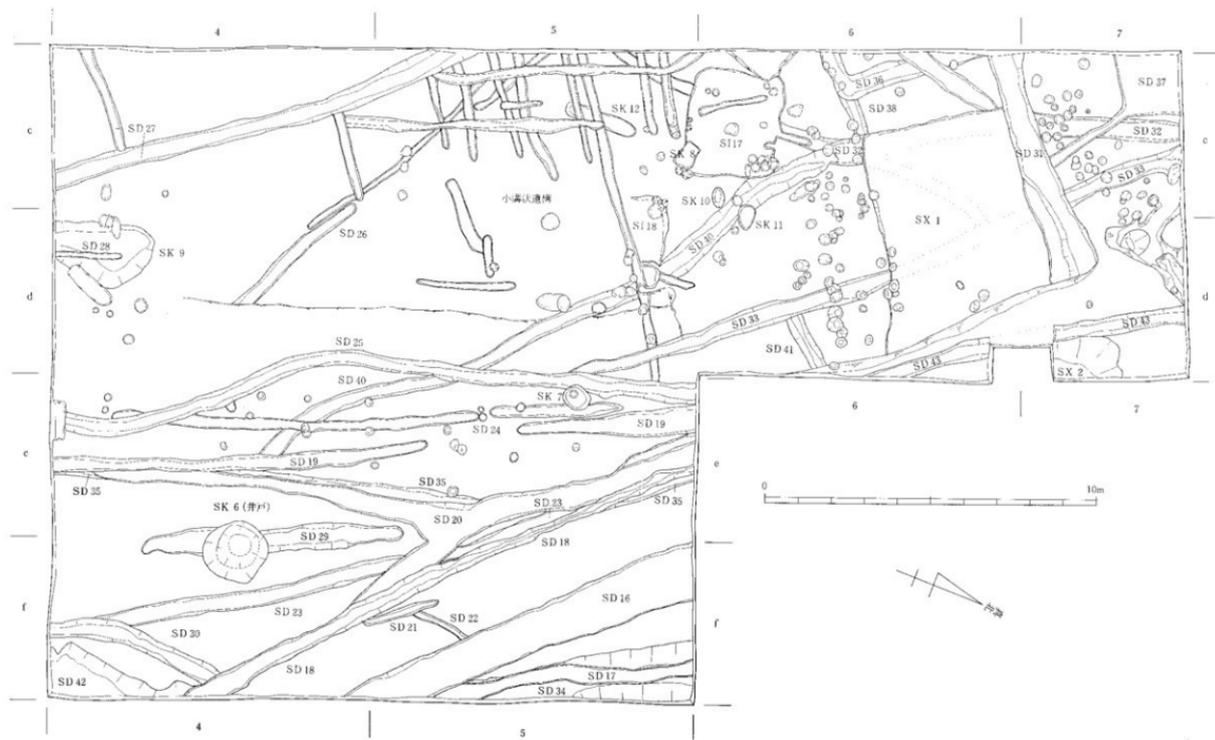


層・位	土 色	土 質	そ の 他
I-1	10YR5/6 靑 色	砂質シルト	しまりが無い
I-2	10YR5/6 靑 色	砂質シルト	酸化鉄, マンガン粒を少量含む
II	10YR5/6 におい黄褐色	砂質シルト	
III	10YR5/6 におい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
A	10YR5/6 におい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量含む
B	10YR5/6 におい黄褐色	シルト	酸化鉄を洗ふ, 粘性が強い
C	10YR5/6 灰 黄 褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
D	10YR5/6 暗 靑 色	シルト	酸化鉄を含む
a	10YR5/6 灰 黄 褐色	シルト	酸化鉄を含む, 粘性有り
b	10YR5/6 におい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む, 粘性有り
X	10YR5/6 におい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
Y	10YR5/6 におい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む, しまりが強い

第5図 調査区南壁土層断面図

V. 発見遺構と遺物

本調査区における発見遺構は、竪穴住居跡2軒（S I17, 18）、井戸跡1基を含む土壇7基（SK6～12）、溝28条（SD16～43）、小溝状遺構（17条1群）、ピット146個がある。各遺構の概要は次の通りである。



第6图 第3次調査区通構配置図

1. 住 居 跡

(1) 17号住居跡

〔平面形、保存状況、重複〕 南東角付近を8号土壌に切られ、北西角付近を攪乱層により削平されているが、比較的保存状況は良い。平面形は、東西軸がやや長い、ほぼ方形を呈す。重複関係は、32、40号構、小溝状遺構（NE-SW1）を切っており、8号土壌に切られている。また、住居跡の埋没過程において、堆積土の11層上面から掘り込まれた溝が、住居跡の西寄りに、幅20cm、長さ220cmに渡って検出された。

〔規模〕 17号住居跡は、南北軸2.85m、東西軸3.20mを計る。かなり小規模な竪穴住居跡である。

〔堆積土〕 堆積土は5～15cm程度残存する。全体的に自然堆積の状況を呈し、壁際付近では土層の細分が可能であったが、中央付近は、全体的に暗褐色のシルト層が分布している。カマド部分の堆積土には焼土や炭化物が少量含まれているが、一般的なカマドの周辺の状況と比較すると、その密度は非常に低いようである。

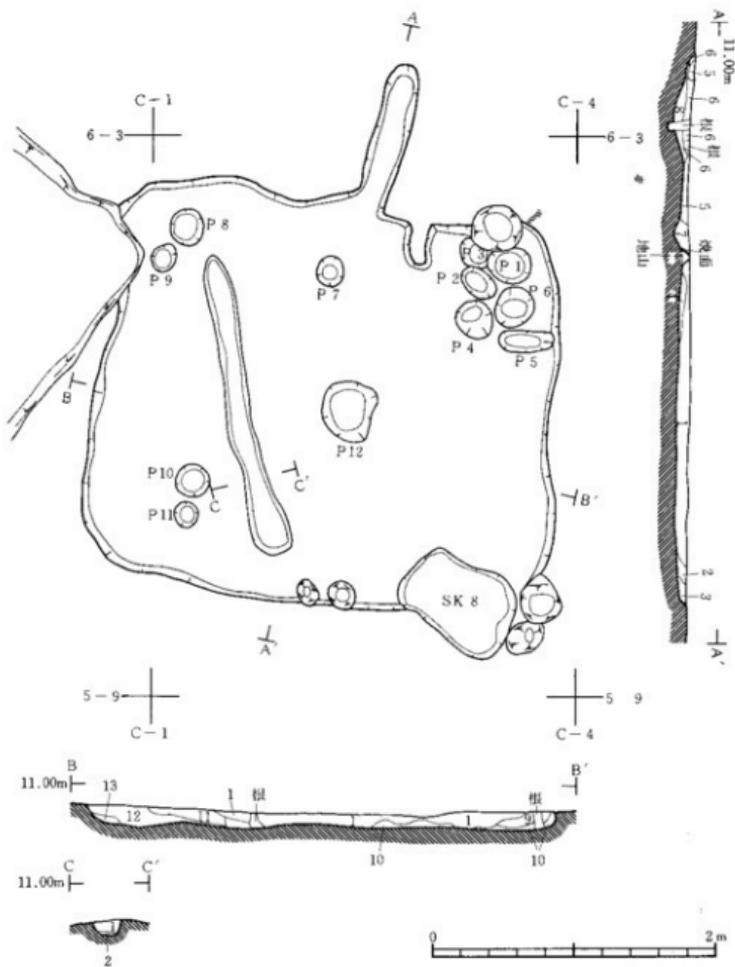
〔壁、床面〕 壁面は、四辺とも緩い凹凸が認められる。床面からの立ち上りは丸味をもって立つが、その傾斜は緩い所と急な所がある。床面はほぼ平出である。中央付近は、かなり良くしまっているが、壁面に近くなるにつれて、ややしまりなくなってくる。

〔柱穴〕 ビットは東北角付近に6個、西北角付近に2個、南西角付近に2個、カマド付近に1個、住居跡中央に1個の計12個検出された。各角のビットは、柱穴になる可能性もあるが、柱痕跡の検出できたものではなく、また南東角にはビットが検出されなかったので、柱穴と断定することはできない。

〔カマド〕 カマド本体は残存していないが、煙道の底面付近と、カマド右袖の基底部が残っている。煙道は幅25cm、長さ110cmを計り、北壁の中央よりやや東に寄った所に接続している。煙道の中軸線は、住居跡の東辺及び西辺からそれぞれ約150cm（5尺）、約180cm（6尺）の所に位置する。カマド本体は、右袖の基底部が幅20cm、長さ34cmの範囲で残っている。カマドの焼土面は完全に失われ、その痕跡も残っていない。

〔遺物出土状況〕 堆積土中からの遺物出土量は少なく、土師器及び須恵器片が11点出土したにすぎない。床面からは実測可能な土師器2個体と須恵器1個体及び小破片が26点出土した。実測図に示した3個体は、全て住居跡東壁中央付近からまとまって出土したものである。須恵器甕は上部を大きく欠損しているが、正立の状態で出土し、土師器2個体は、この須恵器の北側に横転しかかった状態で出土した。

〔出土遺物〕 土師器甕1は深鉢に近い形態のもので、体部と口縁部の境がわずかに緩くくび



17号住居跡観察表

規模	方向	壁残存高	カマド	厨 溝	土柱穴	遺 灰	遺 骨
南北軸2.85m	南北軸	東4~7cm	位置 北壁中央付近	なし			
東西軸3.20m	N-6°-W	西5~11cm	燃焼部 不明	床面標高	不明		
面積9.12㎡	東西軸	南2~7cm	埋 込 111×24	10.72m			
	N-96°-W	北2~8cm					

第7図 17号住居跡実測図

17号住居跡

	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9	P 10	P 11	P 12
平面形	円形	楕円形	円形	円形	楕円形	円形	円形	円形	円形	円形	円形	楕円形
規模	30×25	28×17	25×24	29×25	49×26	30×27	22×19	26×25	22×19	25×21	18×17	46×41
深さ	7	16	6	20	10	25	12	21	5	7	4	19
基礎土	シルト	シルト	シルト	シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト

17号住居跡

層位	土色	土質	その他
1	10Y R 5/ 暗 褐色	シルト	焼土を微量に含む しまり有り
2	10Y R 5/ 褐色	粘土質シルト	しまり有り
3	10Y R 5/ 黄 褐色	粘土質シルト	明褐色土のブロックを含む しまり有り
4	10Y R 5/ 黄 褐色	粘土質シルト	炭化物を微量に含む しまり有り
5	10Y R 5/ 褐色	粘土質シルト	明褐色土塊土、炭化物を混入 しまり有り
6	10Y R 5/ 暗 褐色	粘土質シルト	炭化物、焼土混入 しまり有り
7	10Y R 5/ 暗 褐色	シルト	焼土混入 しまり有り
8	10Y R 5/ 褐色	粘土質シルト	しまり有り
9	10Y R 5/ 暗 褐色	粘土質シルト	炭化物、灰、焼土混入 しまり有り
10	10Y R 5/ 褐色	シルト	しまりや有り
11	10Y R 5/ 褐色	粘土質シルト	しまり有り
12	10Y R 5/ 黄 褐色	粘土質シルト	しまり有り
13	10Y R 5/ 暗 褐色	粘土質シルト	しまり有り

17号住居跡 小溝セクション東西ベルト

層位	土色	土質	その他
1	10Y R 5/ 暗 褐色	シルト	ややしまり有り
2	10Y R 5/ 黄 褐色	砂質シルト	やや粘り有り ややしまり有り

れている。底部には木葉痕が認められ、ロク口は使用されていない。土師器甕2は、1より小形で、体部と口縁部の境は著しくくびれ、口縁は強く外反する。1と同様に底部に木葉痕を有し、ロク口は使用されていない。1、2ともロク口は使用されていないが、時期的には表彰ノ入式期（平安時代）のものと考えられる。須恵器甕3は、底部から体部中程までの破片で、赤褐色に焼けており、かなり軟質である。

(2) 18号住居跡

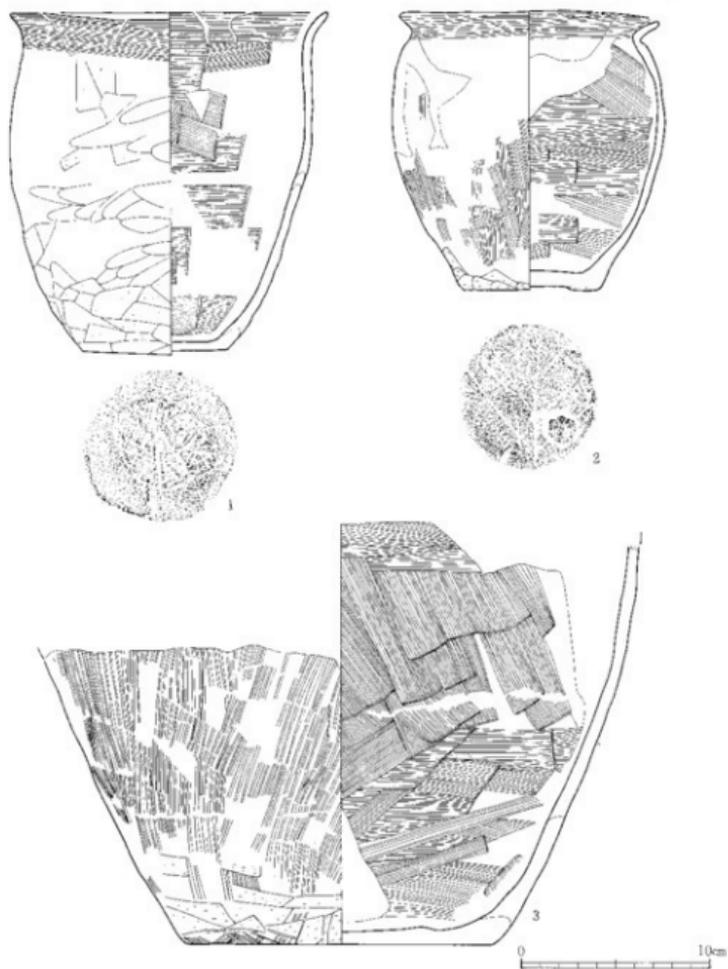
〔平面形、保存状況、重複〕 カマドの周辺部及び北壁の西側が部分的に残存するだけの住居跡で、保存状況が極めて悪い。北西角がほぼ直角に折れていることから、平面形は正方形または長方形と考えられる。重複関係は40号溝及び小溝伏遺構（SW7）を切っている。

〔規模〕 北壁の西半と、西壁の北端を除く四壁のほとんどが失われているために、その規模は明らかでない。ただし、ピット1～9及び1号土壇はこの住居跡に関係すると思われるので、南北4m、東西3.5mを超えるものと推察される。

〔堆積土〕 住居跡全体が削平されているため、堆積土が残っていたのはカマド周辺の極めて限られた部分である。この部分は、カマドを反映して、焼土及び炭化物の混入する割合が多くなっている。

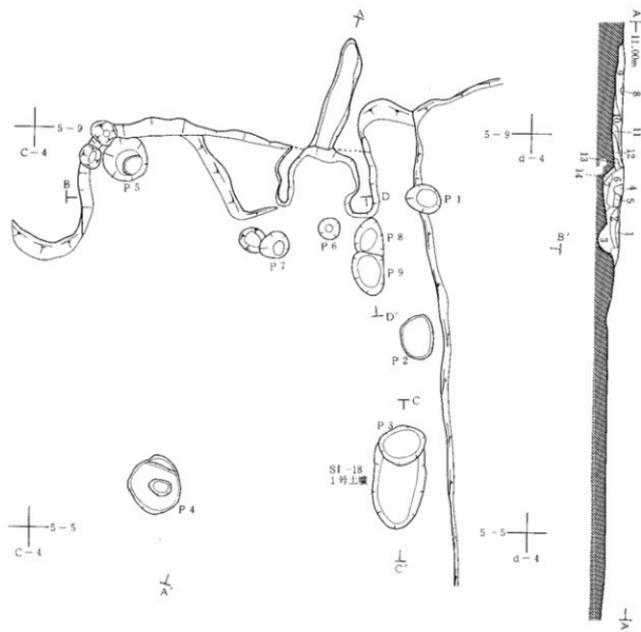
〔壁、床面〕 壁は、残存部分では緩やかな立ち上りを呈している。床はカマドの西側にわずかに残っているだけであり、他の部分については削平により不明である。

〔柱穴〕 ピットは9個検出されたが、柱痕跡が認められたものはない。配置関係からみると、各角に位置する、または位置すると思われるP1、3、4、5を柱穴と考えることもできるが、配列が不規則であるために、この住居跡の柱穴となりうるかどうか不明である。



遺物%	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			法		焼	残存	分類	写真図版
				1線部	線部	底部	C1線部	体部	底部	割合	11種				
1	土師器	壺	+	コナナ	ナナ	ヘナ	コナナ	ヘナナ	ヘナナ	18.1	16.8	7.9	4s		55-2
2	土師器	壺	座	コナナ	ハケ	ナ	コナナ	ヘナナ	ヘナナ	14.8	13.6	7.1	完		55-1
3	土師器	壺	座	ナナ	ナ	ヘナ	ヘナナ	ヘナナ	ヘナナ	(22.3)		16.3	1s		55-6

第8図 17号住居跡出土遺物



18号住居跡

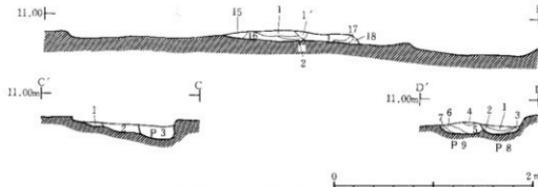
層位	土色	土質	その他
1	10YR5/3 緑褐色	シルト	焼土、炭化物をつお状に含む、黄褐色土を含む
2	10YR5/3 緑褐色	粘土質シルト	焼土、炭化物をつお状に含む
3	10YR5/3 緑褐色	粘土質シルト	焼土、炭化物のブロックを含む、黄褐色土を含む
4	10YR5/3 緑褐色	シルト	黄褐色土を含む
5	10YR5/3 緑褐色	シルト	焼土、炭化物をつお状に含む
6	10YR5/3 緑褐色	シルト	焼土、炭化物のブロックを含む、土器片を含む
7	10YR5/3 褐色	粘土質シルト	
8	10YR5/3 黄褐色	シルト	
9	10YR5/3 褐色	シルト	土器片を含む
10	10YR5/3 緑褐色	シルト	焼土、炭化物をつお状に少量含む、黄褐色土を含む
11	10YR5/3 褐色	シルト	
12	10YR5/3 褐色	粘土質シルト	黄褐色土を含む
13	10YR5/3 黄褐色	粘土質シルト	
14	10YR5/3 緑褐色	シルト	炭化物をつお状に含む、黄褐色土を含む
15	10YR5/3 黄褐色	粘土質シルト	焼土、炭化物をつお状に含む、マンガン粒を含む
16	10YR5/3 褐色	シルト	
17	10YR5/3 褐色	シルト	黄褐色土を含む
18	10YR5/3 黄褐色	シルト	マンガン粒を含む

18号住居跡 1号土嚢

層位	土色	土質	その他
1	10YR5/3 黄褐色	砂質シルト	褐色土のブロックを含む
2	10YR5/3 黄褐色	シルト	褐色土の小ブロックを含む

18号住居跡 8.9ピット

層位	土色	土質	その他
1	10YR5/3 褐色	砂質シルト	少量の炭化物、酸化物を含む
2	10YR5/3 暗褐色	粘土質シルト	
3	10YR5/3 暗褐色	シルト	黄褐色土を含む
4	10YR5/3 暗褐色	シルト	焼土、炭化物をブロックに含む
5	10YR5/3 黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量含む
6	10YR5/3 褐色	シルト	酸化鉄を微量含む
7	10YR5/3 黄褐色	シルト	酸化鉄を少量含む



18号住居跡観察表

施設	方向	特殊存否	コマ	築溝	土坑	重層	備考
南北軸 (1.1m)	南 北 軸	無 な し	位 置 北 東 外 角 付近	全 し			南 北 側 平
東西軸 (2m)	N-47-W 49	無 な し	築 溝 27.65m		不 明		
面積 (2.2㎡)	N-94-W 23	無 な し	築 溝 115×27	床 面 高 度			
			北 3-8 cm	10.72m			

18号住居跡

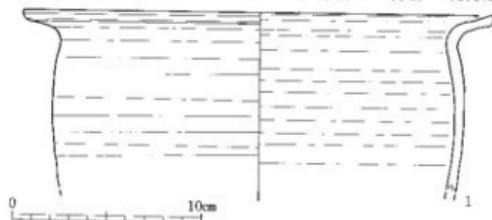
	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	P 9
平面形	枳内形	枳内形	枳内形	枳内形	円形	円形	枳内形	枳内形	枳内形
幅	36×28	42×34	48×38	54×52	46×46	32×22	30×27	34×28	46×45
深さ	37	9	19	12	32	12	13	8	10
築 基 土	砂質シルト	シルト	シルト	シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	粘土質シルト	シルト	シルト

第9図 18号住居跡実測図

〔カマド〕 カマドは住居跡北壁（中央付近と思われる）に付設され、煙道の底部とカマド本体の両袖基底部が残存している。煙道は、幅25cm前後、長さ115cmを計る。煙道の中軸線は、住居跡及びカマド本体の中軸線よりやや東に傾いている。袖部は右側が幅20cm（焚口付近は幅35cm）、左側が幅15～20cmで、床面よりの高さが15cm前後残存している。残存寸法は、幅が内側で63cm、外側で105cm、奥行きは63cmを計る。燃焼部の焼面は全く残存していない。

〔遺物出土状況〕 出土した遺物は、全て小破片で、カマド内、煙道内の堆積土中から出土したものがほとんどである。床面からは内黒の土師器杯の底部付近の破片が1点出土しただけである。

〔出土遺物〕 出土遺物は全て小破片であるため、実測できたのは図示した土師器甕が1点あるだけである。器面はロクロ調整され、体部と口縁部の境付近がわずかに緩くくびれ、口縁部



は強く外反し、口唇部は外側に向けて平坦になっている。床面から出土した土師器杯の底部には糸切り痕が認められるので、これらの出土土器は表杉ノ入式期と考えられる。

遺物%	種	器	形	外面調整			内面調整			法量			残存	分	類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	器高	口径	底径				
1	土師器	甕		ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ		19.4	25.0		1/2			

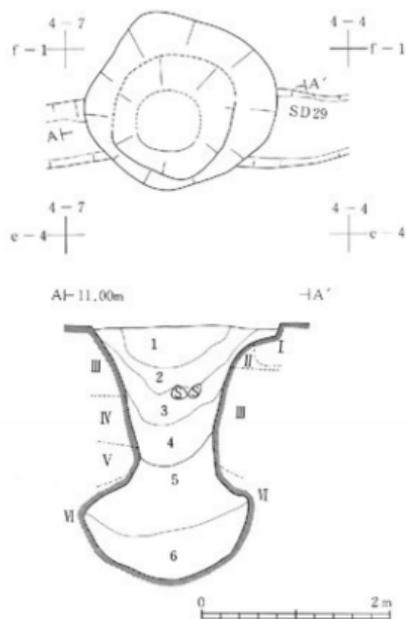
第10図 18号住居跡出土遺物

2. 土 墳

(1) 6号土墳（井戸跡）

〔平面形、断面形、重複、規模〕 平面形は確認面で長軸203cm、短軸190cmの不整円形を呈す。底面は、確認した範囲で直径60cm、推定約70cmの円形を呈する。断面形は、確認面からの深さ140～160cmまでは立ち上りの急な擋鉢状を呈するが、ここからは壁面の地山が砂を多く含むために崩落し、壁面が深くえぐられて偏平な球形を呈する。このため、全体的な断面形は、頸の長い壺のような形状を呈している。深さは確認面から270cmを計る。29号溝を切っている。

〔堆積土〕 堆積土は5層に分けられたが、これは更にグライ化の弱い1～4層までの上部堆積土層と、グライ化が進行し、水分を多く含む5～6層の下部堆積土層とに大別される。上部



第11図 6号土壌(井戸跡)実測図

(2) 7号土壌

〔平面形、断面形、重複、規模〕

平面形は確認面で長軸83cm、短軸69cmの不整形を呈し、断面形は舟底状を呈し、深さ16cmを計る。24、25号溝を切っている。底面の東南寄りに直径25cm、深さ14cmのピットがある。

〔堆積土〕 3層からなり、大部分は炭、焼土を含む黒褐色シルトであるが、壁面には、にぶ

堆積土層中には、近世瓦、無釉陶器、施釉陶器片をはじめ、土師器、須恵器片等、多くの遺物が含まれているが、下部堆積土中には植物遺体が多く含まれるだけで、他の遺物はほとんど含まれない。

〔出土遺物〕 人工遺物としては石臼の破片、二次加工痕のある剃片・土師器・須恵器・無釉陶器の埴鉢・施釉陶器の皿、古代及び近世の瓦が出土している。自然遺物としては、直径5cm程の木片をはじめとする多くの植物遺体と、カラス貝の貝殻(外皮)がある。

層位	土色	土質	その他
1	10YR 5/1 濃い黄褐色	砂質シルト	小石混入
2	10YR 5/6 黄褐色	粘土質シルト	5cm台石混入
3	10YR 5/7 褐色	砂質シルト	10cmぐらいの石混入
4	10YR 5/8 褐色	粘土質シルト	
5	10YR 5/1 灰色	粘土質シルト	木片を多量に含む
6	10YR 5/3 緑灰色	粘土質シルト	
I	10YR 5/6 黄褐色	粘土質シルト	
II	10YR 5/1 濃い黄褐色	砂質シルト	
III	10YR 5/1 濃い黄褐色	砂質シルト	暗褐色土を含む
IV	10YR 5/1 濃い黄褐色	砂質シルト	
V	10YR 5/1 濃い黄褐色	粘土質シルト	
VI	10YR 5/1 濃い黄褐色	砂質シルト	

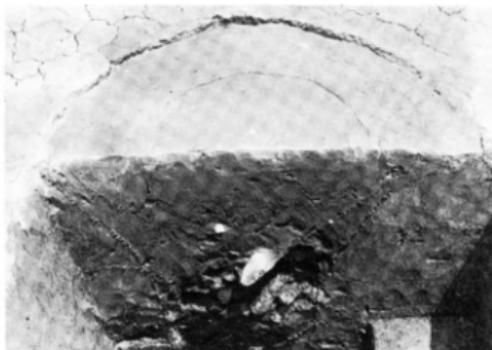
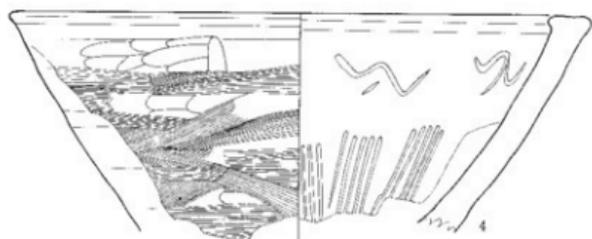
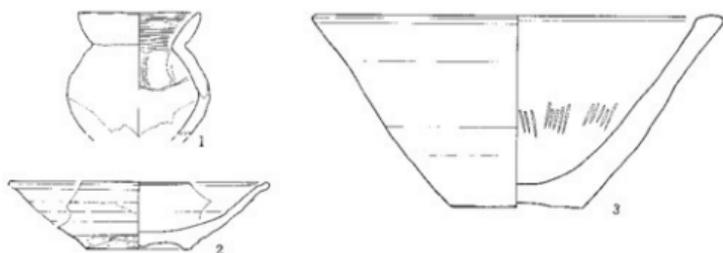


写真1 6号土壌(井戸跡)断面



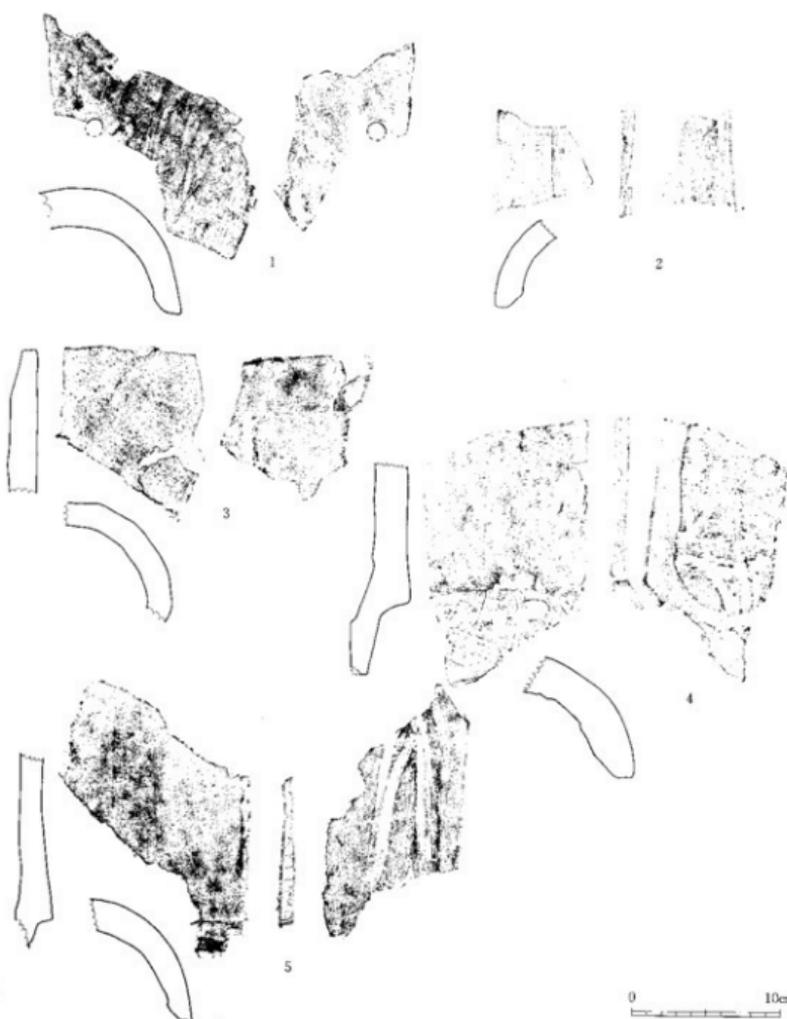
0 10cm

遺物No.	種別	器種	器位	外面装飾			内面装飾			法			残存	時期	写真掲載
				線部	点部	文部	線部	点部	文部	器高	口径	底径			
1	土器	壺	1-2層				ヨコナリ	ナシ		6.5	8.4		1/4		
2	黒種陶器	鉢	1-4層	ヨコナリ	ヨコナリ	ナシ	ヨコナリ	ヨコナリ	ナシ	3.6	13.6	5.4	1/4		56-2
3	黒種陶器	鉢	5層				筋目			10.2	31		1/4		
4	黒種陶器	鉢	4層	ヘラナリ	ヘラナリ		ヨコナリ	筋目		(11.6)	21.2	7.4	1/4		56-1, 2



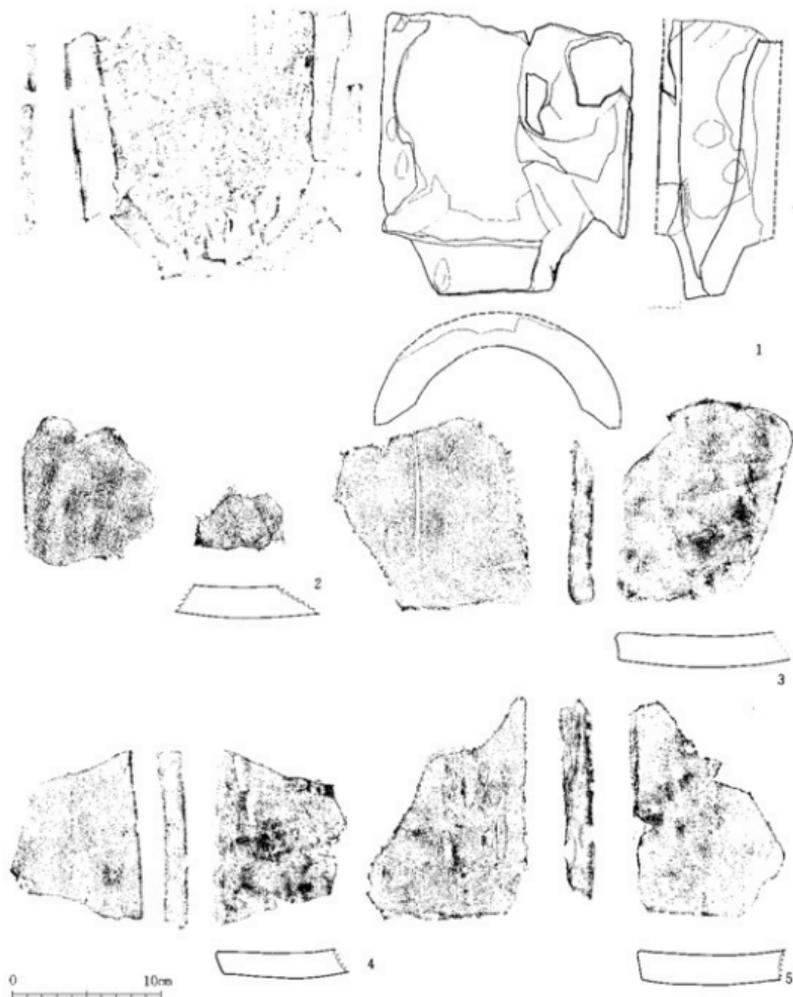
遺物No.	種別	器種	器位	外面装飾			内面装飾			法			残存	時期	写真掲載
				線部	点部	文部	線部	点部	文部	器高	口径	底径			
5	瓦	平瓦	表土			筋目				(12.1)	(12.2)	3.1		古代	

第12図 6号土壙(井戸跡)出土遺物(1)



遺物No.	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	法 厚			残存	時期	写式図版
						長さ	幅	程度			
1	瓦	丸瓦	1~2層	ヘラナデ	布目	(9.3)	(12.1)	2.6		近世	57-4, 5
2	瓦	丸瓦	2層	ヘラナデ	布目	(7.0)	(6.6)	1.6		近世	
3	瓦	丸瓦	2層	ヘラナデ	布目・ヘラナデ	(7.6)	(10.4)	1.7		近世	
4	瓦	丸瓦	1~2層	ヘラナデ	布目	(14.2)	(8.6)	2.5		近世	
5	瓦	丸瓦	1~2層	ヘラナデ	布目・ヘラナデ	(13.2)	(8.5)	2.1		近世	

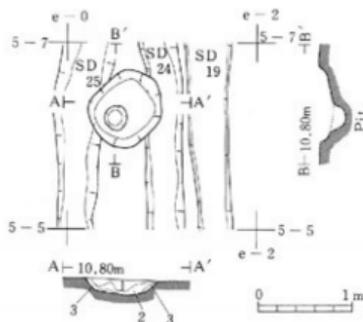
第13図 6号土壌(井戸跡)出土遺物(2)



遺物No.	種別	器種	層位	外面調整	内面調整	法 量			残存	時期	写真回数
						長さ	幅	厚さ			
1	瓦	丸瓦	4 層	ヘラナデ	布 目	(17.6)	(16.5)	(7.9)		近世	56-4, 5
2	瓦	平瓦	1~5層	ヘラナデ	ヘラナデ	(10.2)	(9.6)	2.1		近世	
3	瓦	平瓦	4 層	ヘラナデ	ヘラナデ	(13.1)	(11.2)	2.1		近世	
4	瓦	平瓦	4 層	ヘラナデ	ヘラナデ	(12.0)	(7.9)	1.7		近世	
5	瓦	平瓦	4 層	ヘラナデ	ヘラナデ	(14.4)	(11.0)	2.0		近世	

第14図 6号土壌(井戸跡)出土遺物(3)

い黄褐色シルトが堆積する。壁面自体に焼けた痕跡はない。遺物の発見はない。



第15図 7号土壕実測図

層位	土色	土質	その他
1	10YR5/2 黄褐色	シルト	炭、焼土灰を多量に含む
2	10YR5/2 黄褐色	シルト	焼土を少量含む
3	10YR5/2 黄褐色	シルト	
ピット	10YR5/2 黄褐色	シルト	

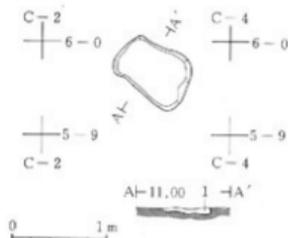


写真2 7号土壕断面

(3) 8号土壕

〔平面形、断面形、重複、規模〕 平面形は長軸80cm、短軸57cmの不整形を呈する。断面形は浅いU字形を呈し、(深さは4~6cmと浅い) 7号住居跡を切っている。

〔堆積土〕 灰黄褐色シルト1層の堆積で、明黄褐色のブロックを含む。遺物の混入なし。



第16図 8号土壕実測図

層位	土色	土質	その他
1	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	明黄褐色土をブロック状に含む 粘土の中程有り。しまり有り

(4) 9号土壕

〔平面形、断面形、重複、規模〕 溝状を呈する土壕で、西辺は直線的に伸びているが、東辺の北側が大きく張んで、不整形となっている。南側は調査区外へ伸びる。長軸は調査範囲で300cm、短軸190cmを計る。深さは中央部で24cmを計り、断面形は壁の立ち上りの緩い舟底形を呈する。東壁中央部を攪乱層によって切られ、また、堆積土の上部を28号溝によって切られている。

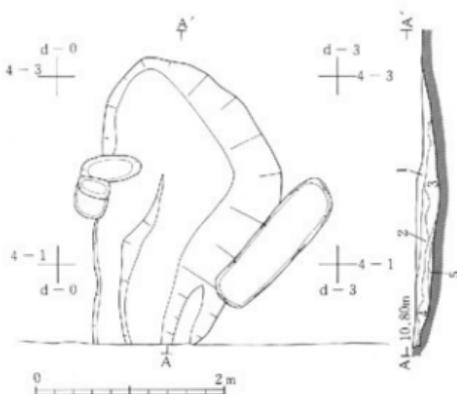


写真3 9号土壕断面

〔堆積土〕 南北ベルト位置で5層に分けられた。黒褐色、暗褐色の粘土質シルトが主体となり、部分的に暗褐色の砂質シルトが堆積する。出土遺物はない。

層位	土色	土質	その他
1	10Y R 7/2 黒褐色	粘土質シルト	しまり有り
2	10Y R 7/2 黒褐色	粘土質シルト	しまり有り
3	10Y R 7/2 黒褐色	粘土質シルト	しまり有り
4	10Y R 7/2 暗褐色	砂質シルト	しまり有り
5	10Y R 7/2 暗褐色	粘土質シルト	しまり有り

第17図 9号土坑実測図▶



(5) 10号土坑

〔平面形、断面形、重複、規模〕 平面形は、長軸58cm、短軸37cmを計る楕円形を呈する。断面形は、東壁側中央部で軽い段がつくが、略舟底形を呈し、深さは26cmを計る。重複はない。



写真4 10号土坑断面

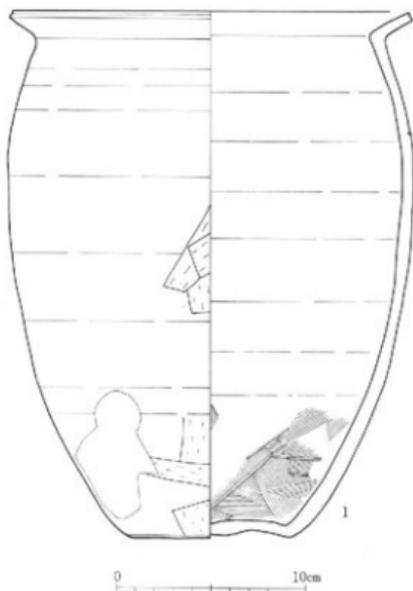
層位	土色	土質	その他
1	10Y R 7/2 黒褐色	シルト	
2	10Y R 7/2 暗褐色	シルト	
3	10Y R 7/2 暗褐色	粘土質シルト	
4	10Y R 5/2 緑色	粘土質シルト	褐色土ブロックに暗褐色土質土
5	10Y R 7/2 緑色	粘土質シルト	暗褐色土を含む
6	10Y R 7/2 暗褐色	粘土質シルト	暗褐色土を含む

第18図 10号土坑実測図▶

〔堆積土〕 6層に分けられた。このうち、第18図5、6層は、土坑内に横転していた状態で

出土した土師器甕で充滿していた土層である。土層の埋土は、褐色から黒褐色シルト、または粘土質シルトで、甕内の埋土は褐色及び暗褐色の粘土質シルトである。なお、出土時における甕の上部は、わずかに落ち窪んではいるものの、落ち込んだ形跡がないので、土層に甕が入った時点で、すでに甕内にはかなり締まった状態で土がつまっていたと考えられる。これは、甕内埋土が縦方向に分層されることから裏付けできるようである。

〔出土遺物〕 上記の通り、土師器甕が1点、横転した状態で出土した。器高が27.9cmあり、内外面ともロクロ調整され、その後、外面は一部ヘラケズリ、内面も一部ヘラナデ調整されている。

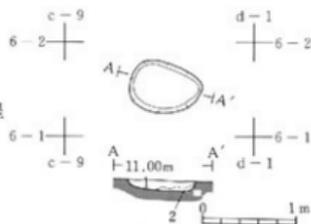


第19図 10号土層出土遺物

遺物No.	種別	形状	層位	外 面 調 整			内 面 調 整			法 量			残存	分 類	写真区画
				口縁部	体部	底面	口縁部	体部	底面	口徑	底径	高さ			
1	土師器	甕		ヤアリ	ロクロ	ヘラ	ロクロ	ロクロ	ヘラナデ	27.9	21.2	8.6	5%		05-3

(6) 11号土層

〔平面形、断面形、重複、規模〕 平面形は長軸73cm、短軸55cmを計り、楕円形を呈する。断面形は舟底状を呈し、深さは11cmを計る。40号溝を切っている。



11号土層

層位	土 色	土 質	そ の 他
1	10 Y R 5 褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
2	10 Y R 5 褐色	シルト	マンガン酸酸化鉄を少量含む

第20図 11号土層実測図



写真5 11号土層断面

〔堆積土〕 褐色の粘土質シルト及びシルトの2層からなる。

〔出土遺物〕 出土遺物は土師器の甕及びびねの小片が各1点出土したにすぎない。

(7) 12号土壌

〔平面形、断面形、重複、規模〕 溝状の細長い楕円形を呈する。長軸227cm、短軸46cm、深さ27cmを計る。横断面はU字形を呈し、縦断面は両端部に軽い段を有するが、概ね舟底状を呈する。南北方向と東西方向の小溝状遺構（NS1、EW6、7）によって切られる。

〔堆積土〕 堆積土は7層に細分された。黒褐色シルトが主体で、壁下端部には褐色ないしにぶい黄褐色シルトが堆積している。

〔出土遺物〕 出土遺物には、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキされた土師器環が1片ある。



層位	土色	土質	その他
1	10Y R 写 黒褐色	シルト	ややしまり有り
2	10Y R 写 黒褐色	シルト	しまり有り
3	10Y R 写 黒褐色	シルト	
4	10Y R 写 黒褐色	シルト	酸化鉄を少量含む
5	10Y R 写 黒褐色	シルト	炭化物を少量含む
6	10Y R 写 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む
7	10Y R 写 褐色	シルト	酸化鉄を含み しまりなし

第21図 12号土壌実測図

3. 小溝状遺構

小溝状遺構は、調査区の西側中央部に18条検出された。検出範囲は東西9m、南北12mに及ぶ。検出した18条のうち13条については、調査区の西側へ更に伸びている。27号溝、17、18号住居跡に切られており、12号土壌を切っている。

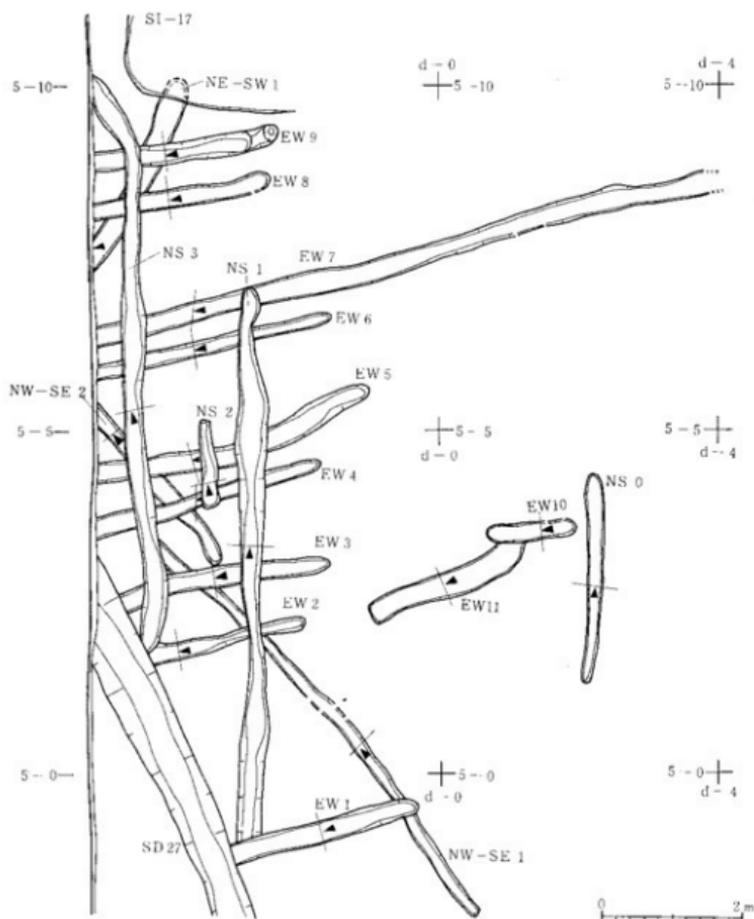
小溝状遺構の溝の上面幅は、最大で42cm、最小で18cmを計るが、平均すると30cm前後幅である。確認面からの深さは3cm～20cmと溝によって異なり、同一溝にあっても位置によって異なっている。堆積土は、基本層と同質の褐色から黒褐色のシルト、または粘土質シルトが堆積しているが、この中に、地山と同質の小ブロックが比較的多く含まれるのが特徴である。水性堆積を示しているものはない。

18条の各小溝は、その方向によって四つのグループに分けることができる。第1は南北方向

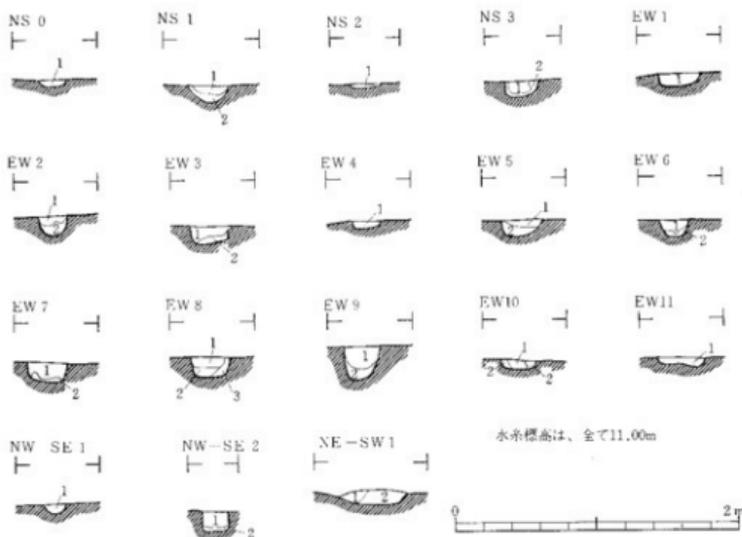


写真6 12号土壌断面

のもの（NS 0～3）、第2は東西方向のもの（EW 1～9）、第3は北西-南東方向のもの（NW-SE 1～2）、第4は北東-南西方向のもの（NE-SW 1）である。これら4グループは、各グループのまとまりによる新旧の関係がある。南北方向のものが新しく、次に東西方向のもの、続いて北西-南東方向及び北東-南西方向の順になっている。北西-南東方向と北東-南



第22図 小溝状遺構平面実測図



方 向	層 号	土 色	土 質	そ の 他
(NS)	0-1	10Y R 5/4	紫 色 粘土質シルト	黄褐色土のブロックを多く含む
	1-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	塊上でマンガン殻を多く含む
	1-2	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	褐色土のブロックを多く含む
	2-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	褐色土のブロックを多量に含む
	3-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	褐色土の小ブロックを少量含む
	3-2	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	褐色土のブロックを多量に含む
	1-1	10Y R 5/4	黄 褐色 シ ル ト	酸化鉄を含む、褐色土のブロックを含む
	2-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	褐色土のブロックを少量含む
	2-2	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	まだら状に黄褐色土を含む
	3-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	褐色土のブロックを含む、酸化鉄を少量含む
(EW)	3-2	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
	4-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	褐色土をまだら状に含む
	5-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	褐色土の塊状を含む
	5-2	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	黄褐色土を小ブロック状に含む
	6-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	酸化鉄を少量含む、褐色土をまばらに含む
	6-2	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	酸化鉄を少量含む、褐色土をまばらに含む
	7-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	褐色土のブロックを含む
	7-2	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	
	8-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
	8-2	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	黄褐色を粒状に含む
(NW-S E)	8-3	10Y R 5/4	黄 褐色 シ ル ト	マンガン殻を少量含む、粘泥有り
	9-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
	9-2	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	砂礫土をまばらに含む、酸化鉄を少量含む
	10-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	酸化鉄を少量含む、褐色土をまばらに含む
	10-2	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	酸化鉄マンガン殻を含む
	11-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	下部の方に褐色土の小ブロックを含む
	1-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	酸化鉄を含む、黄褐色土をまばらに含む
	2-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	
	2-2	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
	(NE-SW)	1-1	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト
	1-2	10Y R 5/4	暗 褐色 粘土質シルト	暗褐色土を少量含む

第23図 小溝状横断面実測図



NS-0



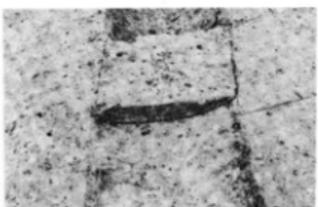
EW-1



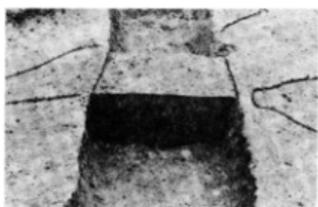
NS-1



EW-2



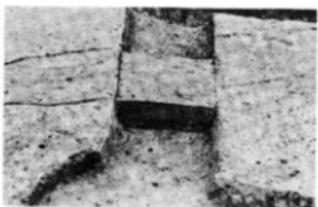
NS-2



EW-3

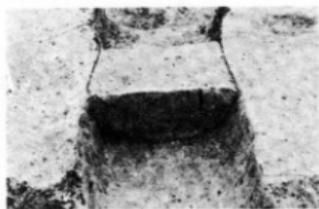


NS-3



EW-4

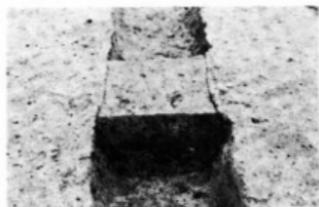
写真7 小溝状遺構断面(1)



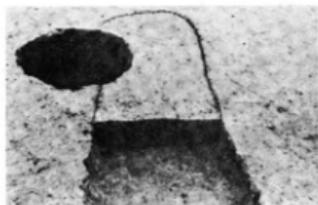
EW-5



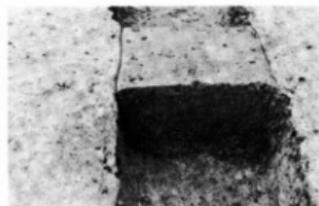
EW-9



EW-6



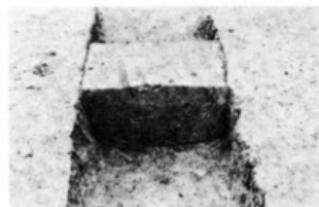
EW-10



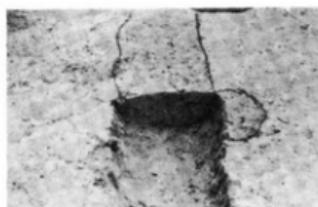
EW-7



NW·SE-2



EW-8



NE·SW-1

写真8 小溝状遺構断面(2)

西方向の小溝状遺構にも新旧の差があると考えられるが、調査区内では明らかにすることができなかった。また、東西方向のEW1小溝状遺構は、上記の基本的新旧パターンと異なり、南北方向のNS1を切り、最も新しく掘られたと考えられる。

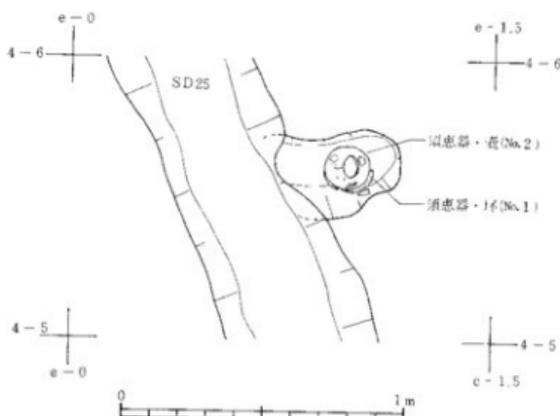
本調査における小溝状遺構は、2条1組と考えられるもの(EW2と3、EW4と5、EW6と7、EW8と9、NS1と2、NW-SE1と2)があり、一つの特徴となっている。このことについては後述する。

4. ピット

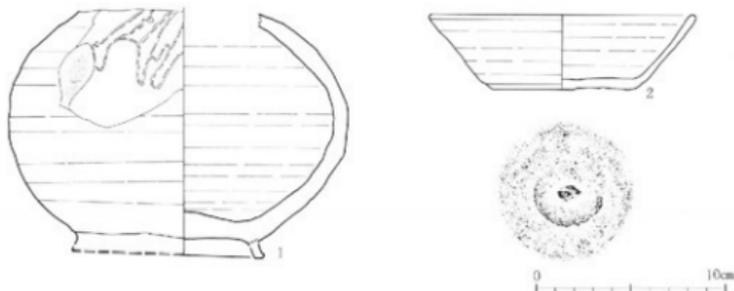
ピットは146個検出されたが、24号溝周辺のピット群のように列状を呈するものも見られたが、建物を構成するような明確なプランを確認できなかった。多くのピットの中にあつて、ピット9からは特異な状況で遺物が出土している。

(ピット9)

25号溝を切る長軸(残存部)42cm、短軸22cmの不整楕円形を呈し、深さ30cmのピットであるが、この底面より須恵器2点が出土した。1点は口径14cm、器高4cmで、底面に回転ヘラ切り痕を有する杯で、他は、残存部高12.6cm、体部径18cmの壺である。壺は杯の上に重ねられた状態で出土している。杯は口縁の一部が欠損し、壺は長頸と考えられる口頸部が欠損している。両者の欠損部は埋納以前のものである。(写真55参照)



第24図 ピット9遺物出土状況図



遺物No.	種別	器形	層位	外面調整			内面調整			計			残存	分類	写真図版
				口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	口径	口径	底径			
1	須恵器	壺		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	12.6		10.2	5/6		55-5
2	須恵器	杯		ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	4.0	14.9	7.4	完		55-4

第25図 ビット9出土遺物

5. 性格不明遺構

(1) 1号性格不明遺構

〔平面形、規模、重複〕 西辺と、これに直角に接続する南辺が検出されたが、東辺は耕作によって削平を受けている。北側は31号溝の北側まで伸びているが、壁が立たず、範囲は不明であった。検出部分の状況から判断すると方形プランと考えられる。重複関係は、31、32、33、39号の各溝を切っている。残存部での規模は、南北6m以上、東西6.5m以上である。

〔壁、底面〕 壁面は、西壁は直線的に伸びているが、南壁は中央部分が内側に駈んでいる。壁の立ち上りは緩い。底面はほぼ平坦であったが、南壁寄りには不定形の浅い落ち込みが認められた。この落ち込みも壁は緩く立ち、底面は平坦である。

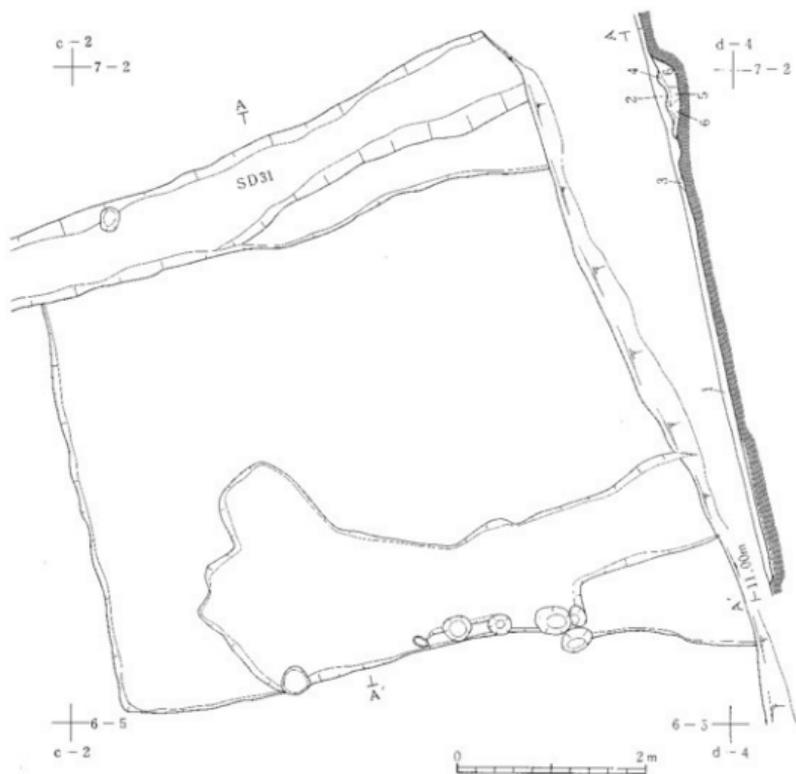
〔堆積土〕 堆積土は10cm前後と浅く、にぶい黄褐色粘土質シルト層が全体的に堆積している。周辺の地山層と差の少ない堆積層であるが、遺物や炭化物を少量含む。



写真9 1号性格不明遺構断面

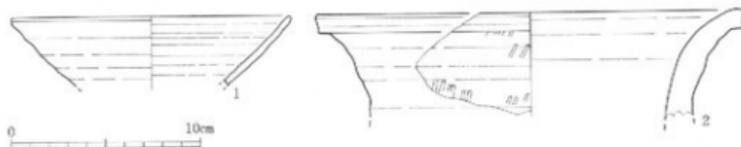
なお、1号性格不明遺構の南側と北側周辺部に、小さなピットが多数検出されているが（第6図参照）、ピットの集中する両辺部の中間にはピットがほとんど検出されないことから考えると、これらのピット群は1号性格不明遺構に何らかの関係があることも考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土中より弥生土器、土師器、須恵器の小破片と、これに混ってフイゴ羽口の破片と鉄滓が少数出土している。特に北東側からの出土が多い。



層位	土色	土質	その他
1	10YR5/1に近い黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄・マンガン粒を含む。粘性、しまり有り
2	10YR5/2 褐色	シルト	酸化鉄を含む。粘性やや有り・しまり有り
3	10YR5/3 黄褐色	シルト	粘性・しまり有り
4	10YR5/4 灰黄褐色	粘土質シルト	粘性・しまり有り
5	10YR5/5 暗褐色	シルト	粘性・しまり有り
6	10YR5/6 黄褐色	シルト	粘性・しまり有り 灰黄褐色土のブロックを含む

第26図 1号性格不明遺構実測図



遺物No.	種類	器形	層位	外面調整			内面調整			法		残存	分類	写真掲載
				口縁部	体部	底面	口縁部	体部	底面	口縁	底径			
1	須恵器	鉢	2層	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ		(3.7)	14.6	5/5		
2	須恵器	壺	1層	ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ		(10.6)	22.6	(5/6)		

第27図 1号性格不明遺構出土遺物

(2) 2号性格不明遺構

〔平面形、規模、重複〕 2号性格不明遺構は、調査区の北東部にその北西部4分の1程が検出された不定形の落ち込みである。検出された範囲では、東西195cm、南北215cmを計る。確認面よりの深さは33cmを計る。43号溝によって西端部を切られている。

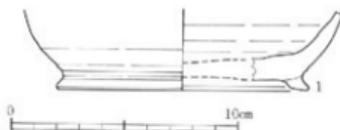
〔壁、底面〕 壁面は全体が緩やかな傾斜面となっており、底面は緩い起伏をもっている。

〔堆積土〕 ぶい黄褐色から灰黄褐色シルト層からなり、東壁部で5層に細分された。層中には酸化鉄やマンガン粒を多く含み、水の影響を多く受けたようである。この落ち込みの堆積後も、この付近（調査区北東部）は凹地となっていたことを示すように、その上部には落ち込み堆積土に類似する土層が30～70cmの厚さで堆積している。

(第29図A～F層)



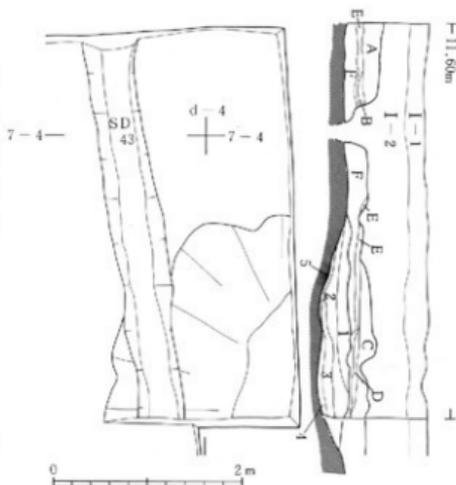
写真10 2号性格不明遺構断面



遺物No.	種類	器形	層位	外面調整			内面調整			法		残存	分類	写真掲載
				口縁部	体部	底面	口縁部	体部	底面	口縁	底径			
1	土師器	高台付鉢	1層		ロクロ	ロクロ		ロクロ	ロクロ		(3.6)	10.8	(5/6)	

第28図 2号性格不明遺構出土遺物

〔出土遺物〕 落ち込み内からは、表に示した通り18点の遺物片が出土したにすぎなかったが、上部のA～F層中からは193片と多くの遺物が出土している。出土遺物はいずれも小片で、図化できるものは第28図に示した高台坪1点だけである。



第29図 2号性格不明遺構実測図 ▶

層位	土色	土質	その他
I-1	10YR5/1 褐色	シルト	
I-2	10YR5/1 褐色	シルト	
A	10YR5/1 褐色	シルト	酸化鉄を含む 暗灰色土のブロックを含む
B	10YR5/1 褐色	シルト	酸化鉄を含む
C	10YR5/1 褐色	シルト	酸化鉄を含む 暗灰色土のブロックを含む
D	10YR5/1 褐色	シルト	酸化鉄を含む
E	10YR5/1 褐色	シルト	酸化鉄・マンガン酸を多量に含む
F	10YR5/1 褐色	粘土質シルト	マンガン酸を含む
1	10YR5/1 褐色	シルト	酸化鉄・マンガン酸を含む 粘性あり
2	10YR5/1 褐色	シルト	酸化鉄・マンガン酸を含む
3	10YR5/1 褐色	シルト	酸化鉄を含む
4	10YR5/1 褐色	シルト	酸化鉄を含む 粘性あり
5	10YR5/1 褐色	シルト	酸化鉄・マンガン酸を含む しまり有り

6. 溝 跡

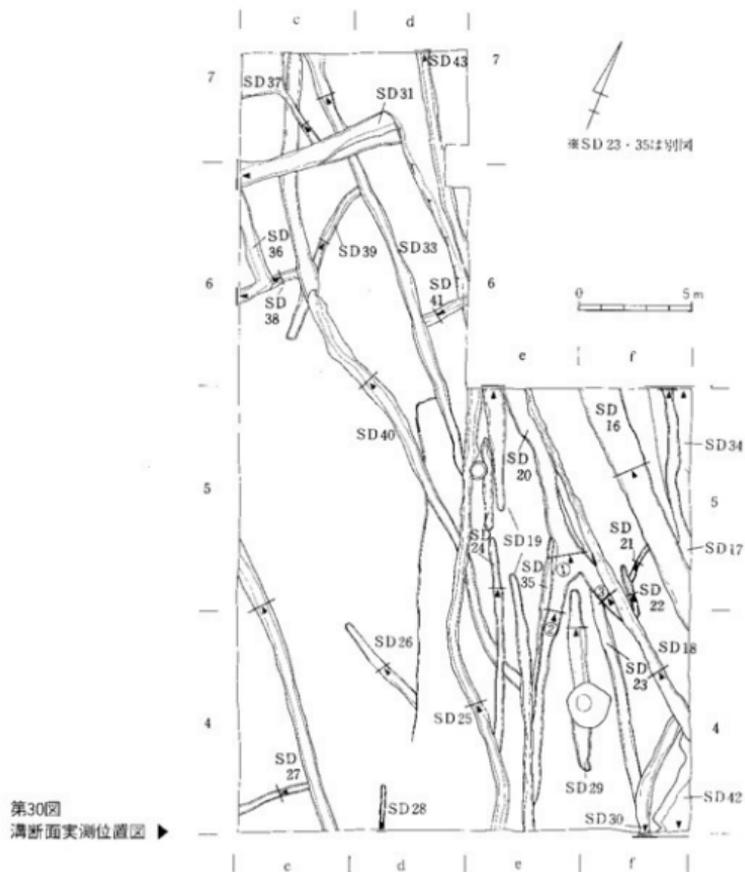
(1) 16号溝

〔形態、規模、方向〕 上面幅138cm、底面幅118cm、深さ12cmで、断面形は浅い逆台形を呈する。調査区東半の北壁から東壁まで、N-45°-Wの方向で直線的に伸びている。底面は、わずかに南が低くなっている。

〔重複〕 17、22、34号溝を切っている。



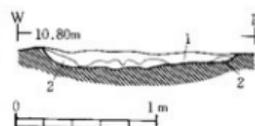
写真11 16号溝断面



第30図
溝断面実測位置図 ▶

層位	土色	土質	その他
1	10 Y R 5/6 灰黄褐色	粘土	酸化鉄をブロッカ状に含む 粘塵しまり有り
2	10 Y R 5/4 褐色	粘上質シルト	酸化鉄をブロッカ状に含む 粘塵しまり有り

第31図 16号溝土層断面図 ▶



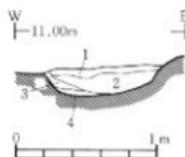
〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は、灰黄褐色粘土と褐色粘上質シルトの2層からなる。底面の凹部には点々と白色火山灰が堆積している。出土遺物は断面四角形の釘状の鉄製品が1点あるだけである。

(2) 17号溝

〔形態、規模、方向〕 上面幅84cm、底面幅約70cm、深さ20cmで、断面形は舟底状を呈す。調査区東半の北壁から東壁まで、N-33°-Wの方向で小さく蛇行して伸びている。底面の傾斜は、検出部の中央が2、3cm高いが、両端部では差がない。

〔重複〕 34号溝を切り、16号溝に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は4層に細分され、褐色から黒褐色の粘土質シルト及びシルトからなる。出土遺物はない。



層位	土色	土質	その他
1	10Y R 7.5/6.5 褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
2	10Y R 6.5/6.5 褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
3	10Y R 5.5/6.5 褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量少量含む
4	10Y R 5.0/6.5 褐色	シルト	酸化鉄を少量含む

第32図 17号溝土層断面図



写真12 17号溝断面

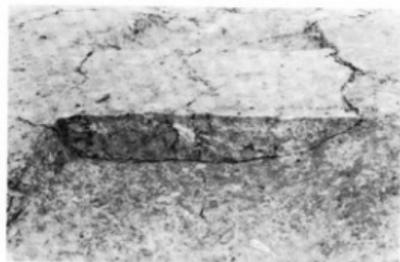


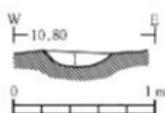
写真13 18号溝断面

(3) 18号溝

〔形態、規模、方向〕 上面幅47cm、底面幅約20cm、深さ10cm前後で、断面形は舟底形を呈す。16号溝と平行し、その西側にN-47°-Wの方向で直線的に伸びている。底面の傾斜はほとんどない。

〔重複〕 20、21、23、30、35、42号溝を切っている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は南部ではぶい黄褐色砂質シルト1層からなる。層中には白色火山灰の小粒が混入している。出土遺物はない。

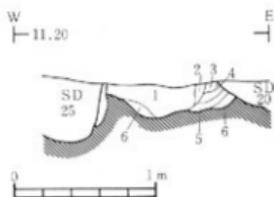


層位	土色	土質	その他
1	10Y R 6.5/6.5 ぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む

第33図 18号溝土層断面図

(4) 19号溝

〔形態、規模、方向〕 上面幅約55cm、底面幅45cm、深さ5~20cmを計る。断面形は舟底形を



層位	土色	土質	その他
1	10Y R 写 灰 黄 褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む
2	10Y R 写 灰 黄 褐色	シルト	酸化鉄を含む。粘性あり
3	10Y R 写 灰 黄 褐色	シルト	酸化鉄を含む
4	10Y R 写 暗 褐色	シルト	酸化鉄を含む。粘性あり
5	10Y R 写 灰 黄 褐色	シルト	しまりあり
6	10Y R 写 灰 黄 褐色	シルト	酸化鉄を少量含む

◀ 第34図 19号溝土層断面図

呈す。検出範囲の中央やや北寄りのところで浅くなり、途中が切れている。方向は調査区南壁から北西に直線的に伸び、その後、弧の内側を西に向けて緩く曲がるが、調査区北端では再び北西方向に直線的に伸びる。全体的な方向としてはN-25°-Wである。底面は両端が北端に比べて約10cm低くなっている。



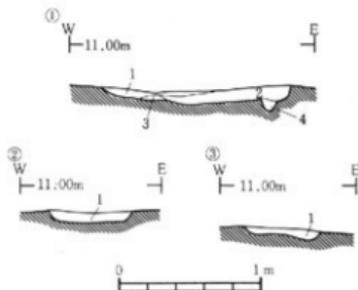
写真14 19・25号溝断面

〔重複〕 40号溝を切り、20、35号溝によって切られている。25号溝は北壁で重複しているが、間に攪乱があるため、その関係は不明である。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は調査区北壁で6層に細分された。暗褐色から灰黄褐色のシルトからなる。出土遺物には土師器の細片が7点あるだけである。

(5) 20号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区の南壁から伸びてきた溝と、東壁から伸びてきた溝とが、途中で合流して北壁に向って伸び、Y字状を呈す。西側の支流は上面幅約60cm、底面幅約50cm、深さ約10cm、東側の支流は上面幅約55cm、底面幅約40cm、深さ約10cmを計る。合流後は規模を増し、上面幅約135cm、底面幅約120cm、深さ約10cmとなる。断面形はどの部分も浅い逆台形を呈する。合流後の方向はN-37°-Wとなっている。また分岐点の角度は、中心から西側が27°、



層位	土色	土質	その他
①-1	10Y R 写 灰 黄 褐色	砂質シルト	灰黄褐色土、黄褐色土、黒褐色土のシルトを少量含む
①-2	10Y R 写 灰 黄 褐色	シルト	黒褐色土のブロックを含む
①-3	10Y R 写 褐色	砂質シルト	
①-4	10Y R 写 灰 黄 褐色	シルト	
②-1	10Y R 写 灰 黄 褐色	シルト	上面に黒い砂質層あり
③-1	10Y R 写 灰 黄 褐色	シルト	灰黄褐色土、黒褐色土のシルトを少量含む

第35図 20号溝土層断面図

東側が24°とほぼ等しくなっている。

〔重複〕 19、23、29、35号溝を切っており、18号溝によって切られている。

〔堆積土、出土遺物〕 黒褐色から灰黄褐色シルトないし砂質シルトが堆積している。出土遺物は土師器の細片が11点あるだけである。



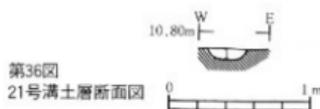
写真15 20号溝断面

(6) 21号溝

〔形態、規模、方向〕 小規模の溝で、上面幅25cm、底面幅18cm、深さ8cmを計る。断面形は舟底状を呈す。南端を18号溝に切られているが、126cmの長さで検出されている。溝の方向はN-39°-Wを向く。底面の傾斜は認められない。

〔重複〕 22号溝を切り、18号溝によって切られている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は暗褐色シルト1層からなる。出土遺物はない。



第36図
21号溝土層断面図

層位	土色	土質	その他
1	10YR 7/2 暗褐色	シルト	酸化鉄を含む 粘性有り



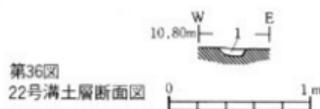
写真16 21号溝断面

(7) 22号溝

〔形態、規模、方向〕 21号溝と同様に小規模な溝で、上面幅18cm、底面幅12cm、深さ5cmを計る。断面形は舟底状を呈す。北端を16号溝、南端を21号溝に切られ、160cmだけ残る短い溝である。方向はN-5°-Eを指す。底面には傾



写真17 22号溝断面



第36図
22号溝土層断面図

層位	土色	土質	その他
1	10YR 5/2 褐色	シルト	酸化鉄を含む

斜は認められない。

〔重複〕 16、21号溝に切られている。

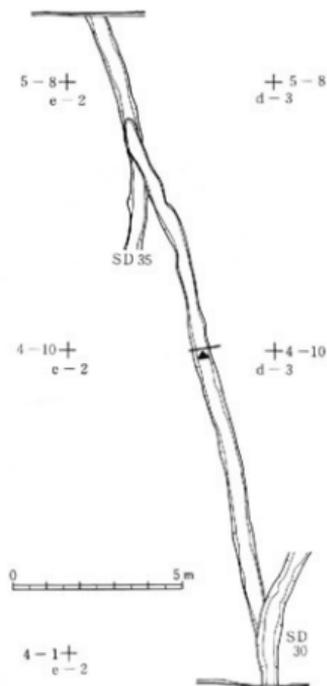
〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は酸化鉄を含む褐色シルト1層からなり、出土遺物はない。

(8) 23号溝

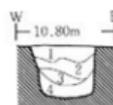
〔形態、規模、方向〕 調査区の南壁から北西方向に、北壁近くまで直線的に伸び、35号溝と重なった所で途切れ、立ち上りの急な壁となる。上面幅44cm、底面幅34cm、深さ36cmを計り、断面形は逆台形を呈す。方向はN-34°-Wを指す。底面は緩い起伏があるものの、全体としてはほぼ平里となっている。

〔重複〕 35号溝を切り、18、20、30号溝によって切られている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は4層に分けら



第39図 23号溝平面図



第38図
23号溝土層断面図

層位	土色	土質	その他
1	10Y R 5/1に濃い黄褐色	シルト	しまり有り
2	10Y R 5/1に灰黄褐色	シルト	粘り有り
3	10Y R 5/1に濃い黄褐色	粘土質シルト	
4	10Y R 5/1に濃い黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン粒を含む

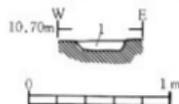


写真18 23号溝断面

れ、上部2層は、に濃い黄褐色と灰黄褐色のシルト層からなり、下部2層は、に濃い黄褐色の粘土質シルトからなる。出土遺物は、土師器製の細片1点と石鏃が1点である。

(9) 24号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区中央に直線的に伸びて検出された。南北両端とも調査区内で途切れ、中央よりやや北側の一部も、途中で切れ



第40図
24号溝土層断面図

層位	土色	土質	その他
1	10Y R 5/1に濃い黄褐色	シルト	酸化鉄・マンガン粒を含む

ている。上面幅35cm、底面幅20cm、深さ6cmを計り、断面形は浅い逆台形を呈す。方向はN-28°-Wを指す。底面は、北西側が約10cm程低くなっている。

〔重複〕 7号土城及び25号溝によって切られ、40号溝を切っている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土にはよい黄褐色シルト層からなり、出土遺物はない。

(10) 25号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区南壁よりS字状に蛇行した後、直線的に北西に伸びる。上面幅43cm、底面幅30cm、深さ30cmを計る。断面形は逆台形を呈す。方向はN-16°-Wを指す。底面は南西側が約10cm低くなっている。

〔重複〕 24、33、40号溝を切り、7号土城に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は3層に分けられるが、全て、によい黄褐色を呈するシルトからなる。出土遺物はない。



第41図
25号溝土層断面図



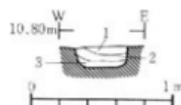
層位	土色	土質	その他
1	10Y R 5/1 によい黄褐色	シルト	やや細粒を少し含む
2	10Y R 5/1 によい黄褐色	シルト	
3	10Y R 5/1 によい黄褐色	シルト	炭化飯を含む、土器片あり

(11) 26号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区中央より、やや南寄りで検出された。南東部は削平されて切れており、北西端は南東残存端部より440cmの所で立ち上がる。上面幅36cm、底面幅26cm、深さ14cmを計り、断面形は逆台形を呈す。方向はN



写真19 25号溝断面



第42図
26号溝土層断面図

層位	土色	土質	その他
1	10Y R 5/1 黄褐色	砂質シルト	炭化飯を少し含む
2	10Y R 5/1 によい黄褐色	砂質シルト	炭化飯を含む
3	10Y R 5/1 黄褐色	砂質シルト	炭化飯を含む、土器片あり



写真20 26号溝断面

-63°-Wを指す。直線的に伸びる。底面は北西側が13cm程低くなっている。

〔重複〕 重複はない。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は3層に分けられ、1層は黄褐色、2層はにぶい黄褐色、3層は褐色を呈し、土質はいずれも砂質シルトである。出土遺物はない。

(12) 27号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区南壁の西端近くから、西壁中央やや南寄りに向けて直線的に伸びる溝に、これより細い溝が調査区西壁南端から直線的に伸びて直角に接続し、T字状を呈す。太い方は上面幅65cm、底面幅35cm、深さ35cmを計り、断面形は舟底形に近い逆台形を呈す。細い方は上面幅30cm、底面幅20cm、深さ9cmを計り、断面形は浅い逆台形を呈す。方向は、太い方で計測すると、N-38°-Wを指す。底面は双方とも、ほぼ平坦となっている。

〔重複〕 重複はない。

〔堆積土、出土遺物〕 太い方の堆積土は3層からなり、1層は黒褐色シルト、2層はにぶい

② S 11.00m N



① W 11.00m E



層位	土色	土質	その他
①-1	IDYR系 黒褐色	シルト	マンガン粒を含むしまり有り
①-2	IDYR系にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄マンガン粒を含む
①-3	IDYR系 黒褐色	シルト	
②-1	IDYR系 黒褐色	シルト	マンガン粒を含むしまり有り

第43図 27号溝土層断面図



写真21 27号溝断面①



写真22 27号溝断面②

黄褐色シルト、3層は黒褐色シルトとなっている。細い方は、太い方の第1層と同様の黒褐色シルト層1層からなる。出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器の細片のほか、鉄滓や滑石製紡錘車がある。

(13) 28号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区南壁中央よりやや西側で、壁より200cmの所まで検出された、直線的な小形の溝である。上面幅20cm、底面幅14cm、深さ6cmを計り、断面形は舟底形を呈す。方向はN-19°-Wを指す。底面に傾きは認められない。

〔重複〕 9号土壌を切っている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土にはふい黄褐色砂質シルト1層からなる。遺物は、土師器、須恵器片のほか、古瓦片が1点出土している。



第44図
28号溝土層断面図

層位	土色	土質	その他
1	10Y R 5/1 黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む。しまりが強い

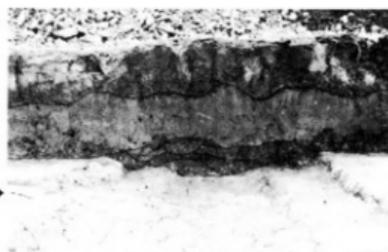


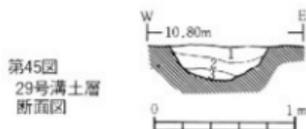
写真23 28号溝土層断面 ▶

(14) 29号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区南東部に、両端が途切れて検出された。上面幅68cm、底面幅約30cm、深さ23cmで、断面形は舟底状を呈す。方向はN-25°-Wで直線的に伸び、底面は中央付近がわずかに凹むが、両端部には差が認められない。

〔重複〕 20号溝を切っており、6号土壌に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は3層に分けられ、1層にはふい黄褐色シルト、2層は褐色シルト、3層は暗褐色粘土質シルトからなる。出土遺物は土師器片が1点あるにすぎない。



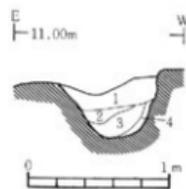
第45図
29号溝土層断面図

層位	土色	土質	その他
1	10Y R 5/1 黄褐色	シルト	酸化鉄を含む。粘りが強い
2	10Y R 5/1 褐色	シルト	酸化鉄を含む。粘りを少し含む
3	10Y R 5/1 暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む

(15) 30号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区の南東角付近に、南東方向に内側に向けた弧状に検出された。上面幅65cm、底面幅30cm、深さ45cmで、断面形は舟底状を呈す。弦の方向はN-2°-Eを指す。底面は南西側が5cm程低くなっている。

層位	土色	土質	その他
1	10Y R 5/1 黄褐色	シルト	酸化鉄を含む。しまりが強い
2	10Y R 5/1 黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む。しまりが強い
3	10Y R 5/1 黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
4	10Y R 5/1 黄褐色	シルト	酸化鉄・マンガン鉄を含む。粘りが強い



第46図 30号溝土層断面図

〔重複〕 23、42号溝を切り、18号溝に切られている。

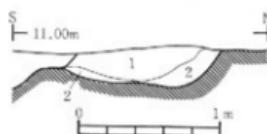
〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は4層に分けられ、1層がにぶい黄褐色シルト、2、3層は灰黄褐色粘土質シルト、4層はにぶい黄褐色シルトからなる。出土遺物はない。



(16) 31号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区北部で検出され、調査区西壁から東壁方向へ直線的に伸びるが、東側は削平を受けている。残存部の東半部では、東側壁面に浅い段を有する。確認面から段の上面までの落差は5cm前後で、この部分は西半部に比べて溝幅が広がっている。西半側は上面幅約80cm、底面幅約55cm、深さ28cmを計り、断面形は舟底状を呈す。溝の方向はN-43°-Eを指す。底面はほぼ平坦である。

写真24 30号溝断面



層位	土色	土質	その他
1	10Y R 写にぶい黄褐色	粘土質シルト	胎痕あり しまり有り
2	10Y R 写灰黄褐色	シルト	胎痕あり、灰黄褐色土をプロット状に含む

第47図 31号溝土層断面図

〔重複〕 33、37、40号溝を切り、1号性格不明遺構によって切られている。

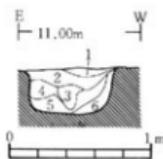
〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は2層に分けられ、1層は灰黄褐色粘土質シルト、2層は黄褐色シルトからなる。出土遺物はない。

(17) 32号溝—欠番—40号溝に同一

(18) 33号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区中央の7号土壇のところから、調査区北壁西寄りに直線的に伸びる。南端は25号溝に切られた所で途切れ、以南は不明である。上面幅62cm、底面幅45cm、深

層位	土色	土質	その他
1	10Y R 写にぶい黄褐色	砂	しまりなし
2	10Y R 写にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む しまりなし
3	10Y R 写 灰黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
4	10Y R 写 灰黄色	砂質シルト	酸化鉄を含む
5	10Y R 写 褐色	粘土質シルト	しまり有り
6	10Y R 写 褐色	粘土質シルト	しまり有り



第48図 33号溝土層断面図

き31cmを計り、断面形はU字形を呈する。方向はN-42°-Wを指す。底面は北西側が約20cm低くなっている。

〔重複〕 39、41号溝を切り、25、31号溝及び1号性格不明遺構に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は6層に分けられた。1層はにぶい黄褐色砂、2層はにぶい黄褐色砂質シルト、3層は暗灰黄色砂質シルト、4層は灰黄色砂質シルト、5、6層は褐色粘土質シルトからなる。出土遺物には、鋸先形の鉄製品が1点ある。



写真25 33号溝断面

(19) 34号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区の北東角に東壁北寄りから北壁東端に伸びる。上面幅185cm以上、底面幅40cm、深さ85cmを計り、断面形は逆台形を呈するが、中央部がU字状に20cm程一段低くなっている。方向はN-31°-Wを指す。底面は南東側が10cm程低い。

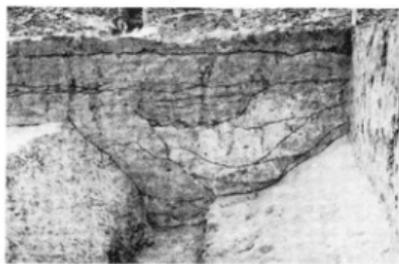
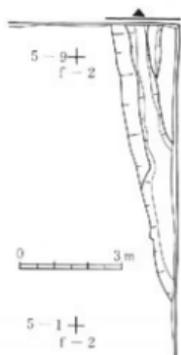
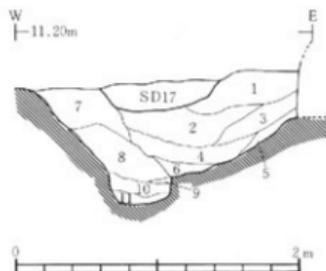


写真26
◀34号溝断面



第49図 34号溝平面図

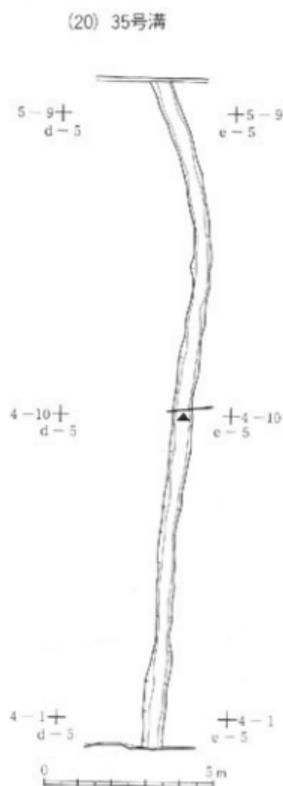
層位	土色	土質	その物
1	10YR5にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む
2	10YR5にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む
3	10YR5にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む 軽鉄あり
4	10YR5にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む
5	10YR5にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む 軽鉄あり
6	10YR5にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む 軽鉄しりあり
7	10YR5にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む
8	10YR5にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄 マンガン粒 京を含む しりあり
9	10YR5にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む
10	10YR5にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む 軽鉄あり
11	10YR5にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む



第50図 34号溝土層断面図

〔重複〕 16、17号溝によって切られている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は、第50図のように11層に分けられる。これは1～6層までと、7～11層までに2分することができることから、34号溝は西側に寄っていた時期と東側に寄っていたからの2時期に分けられる可能性もある。出土遺物には土師器片が5点あるだけである。



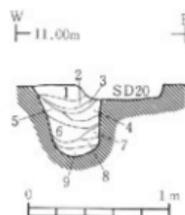
第51図 35号溝実測図

〔形態、規模、方向〕 調査区南壁中央よりやや東に寄った所から北西方向に直線的に伸び、北壁東半の近くで緩く西側にカーブする。上面幅50cm、底面幅30cm、深さ50cmを計り、断面形はU字形を呈す。方向はN-26°-Wを指す。底面はほぼ平坦である。

〔重複〕 18、19、20号溝に切られている。



写真27 35号溝断面



層位	土色	土質	その他
1	10Y R 5/2 褐色	砂質シルト	
2	10Y R 5/2 濃い黄褐色	粘土質シルト	1層よりも粘性有ら
3	10Y R 5/2 褐色	粘土質シルト	
4	10Y R 5/2 濃い黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
5	10Y R 5/2 濃い黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
6	10Y R 5/2 濃い黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
7	10Y R 5/2 濃い黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄をブロック状に含む
8	10Y R 5/2 濃い黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む
9	10Y R 5/2 濃い黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を少量含む

第52図 35号溝土層断面図

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は9層に細分された。1層は褐色砂質シルト、2層はにぶい黄褐色粘土質シルト、3層は褐色粘土質シルト、4～9層まではにぶい黄褐色の粘土質シルトからなる。出土遺物には土師器片が3点ある。

(21) 36号溝

〔形態、規模、方向〕 東駅北寄りにL字形に検出された。東方向側が南北方向側よりやや狭く、深さも浅い。東西側は上面幅50cm、底面幅30cm、深さ15cmを計り、南北側は上面幅70cm、底面幅30cm、深さ40cmを計る。断面形は舟底状を呈す。方向は南北側がN-40°-Wを指す。底面は南北側が15cm前後低くなっている。

〔重複〕 38号溝を切っている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は、東西側の西壁断面で3層に分けられる。1層は暗褐色粘土質シルト、2層はにぶい黄褐色粘土質シルト、3層は黒褐色シルトからなる。出土遺物はない。

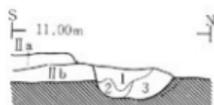
写真28 36号溝断面 ▶

(22) 37号溝

〔形態、規模、方向〕 31号溝の中央付近から調査区北西角にかけて検出された。北西角では検出面で、東西190cm、南北170cmの略方形に広がっている。溝部と方形部との底面に落差はなく、ほぼ平坦になっている。溝は上面幅26cm、底面幅16cm、深さ8cmを計り、底面は舟底状を呈す。溝の方向はN-55°-Wを指す。

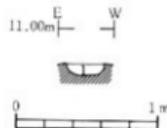
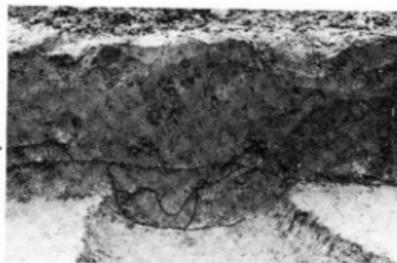
〔重複〕 40号溝を切り、31号溝に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は溝部、方形部とも暗褐色の粘土質シルトからなる。出土遺物はない。



第53図
36号溝土層断面図

層位	土色	土質	その他
1	10Y R/4	砂褐色 粘土質シルト	マンガン酸・酸化鉄を少量含む
2	10Y R/5	にぶい黄褐色 粘土質シルト	
3	10Y R/4	黒褐色	酸化鉄・マンガン酸を少量含むしもあり



第54図
37号溝土層断面図

層位	土色	土質	その他
1	10Y R/4/5暗褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む 灰質褐色を下部に含む

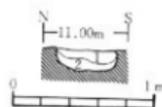
(23) 38号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区の西壁の中央やや北寄りに、東端を40号溝に、西側を36号溝に切られて検出された。検出された部分の長さは110cmである。上面幅40cm、底面幅25cm、深さ15cmを計り、断面形は舟底状を呈す。溝の方向はN-50°-Eを指し、底面に傾きは認められない。

〔重複〕 36、40号溝に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は2層からなる。1層は褐色砂質シルト、2層は褐色粘土質シルトからなる。出土遺物はない。

写真29 38号溝断面 ▶



第55図
38号溝土層断面図

層位	土色	土質	その他
1	10YR 6/4 褐色	砂質シルト	しまりなし
2	10YR 6/4 褐色	粘土質シルト	しまり有り



(24) 39号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区の北部中央付近で、1号性格不明遺構の調査後に検出された。北端を33号溝に、南部を40号溝により切られ、南端はさらに40号溝の南側に伸び、17号住居跡に切られて消えている。東側に内を向けて緩い弧状に伸びている。上面幅36cm、底面幅20cm、深さ7cmを計り、断面形は浅い逆台形を呈す。方向はN-8°-Eを指し、底面は南西側が5cm程低くなっている。

〔重複〕 33、40号溝及び1号性格不明遺構によって切られている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は2層からなる。1層は褐色シルト、2層は暗褐色粘土質シルトからなる。出土遺物はない。



第56図
39号溝土層断面図

層位	土色	土質	その他
1	10YR 6/4 褐色	シルト	しまり有り
2	10YR 6/4 暗褐色	粘土質シルト	しまり有り



写真30 39号溝断面

(25) 40号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区中央やや南寄りから北壁に至るまで緩やかに蛇行しながら伸び

ている。南端は19、20、35号溝に切られたところ
で浅くなり切れている。中央部では上面幅41
cm、底面幅34cm、深さ18cmを計り、切断面はU
字形を呈す。平均的な方向はN-41°-Wを向く。
底面は17号住居跡の北側で段がつき、南側が一
部低くなっているが、検出した両端部の底面を
比較すると、北西側が10cm程低くなっている。

〔重複〕 38、39号溝を切り、19、20、24、25、
31、33、35、37号溝及び、17、18号住居跡、10、
11号土城、1号性格不明遺構によって切られて
いる。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は、中央部で5
層に分けられた。1、2、4層はにぶい黄褐色
砂質シルト、3層は暗褐色粘土質シルト、5層
は黄褐色粘土質シルトからなる。出土遺物には
土師器細片が11点あるだけである。

(26) 41号溝

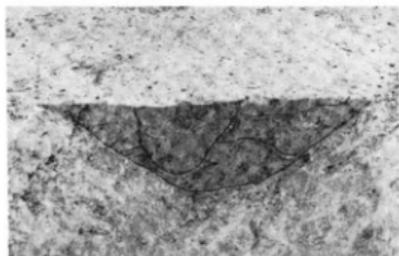
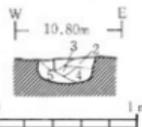


写真32 41号溝断面

〔形態、規模、方向〕 調査区北部の東壁際で検出された。西側を33号溝に切られ、東側を削
平によって失なう。長さ120cmの短かい溝である。上面幅42cm、底面幅5cm、深さ14cmを計り
断面形はV字状を呈す。方向はN-41°-Eを指す。底面の傾きは認められない。

〔重複〕 33号溝に切られる。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は5層からなる。1、3層は褐色粘土質シルト層、2、4、5
層はにぶい黄褐色粘土質シルト層からなる。出土遺物は無い。



第57図
40号溝土層断面図

層位	土色	土質	その他
1	10YR5にぶい黄褐色	砂質シルト	検出物を含む(土器片等)
2	10YR5にぶい黄褐色	砂質シルト	しまり有り
3	10YR5暗褐色	粘土質シルト	しまり有り
4	10YR5にぶい黄褐色	砂質シルト	検出物を含む(土器片等)
5	10YR5黄褐色	粘土質シルト	検出物を含む(土器片等)

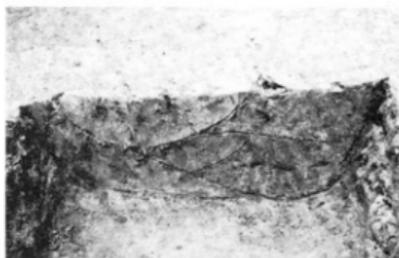
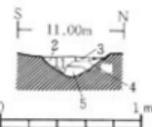


写真31 40号溝断面



第58図
41号溝土層断面図

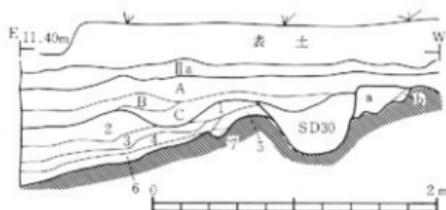
層位	土色	土質	その他
1	10YR5褐色	粘土質シルト	しまり有り
2	10YR5にぶい黄褐色	粘土質シルト	しまり有り
3	10YR5褐色	粘土質シルト	しまり有り
4	10YR5にぶい黄褐色	粘土質シルト	しまり有り
5	10YR5にぶい黄褐色	粘土質シルト	検出物を含む(土器片等)

(27) 42号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区の南東角を斜めに横切って検出された。上面は西側だけが検出された。壁面は調査区東壁に至るまで傾斜を続けているため、底面は不明となっている。溝ではなく大形の土坑の可能性も考えられる。検出範囲で上面幅は140cm、深さ50cmを計る。方向、底面の傾きはともに不明である。

〔重複〕 18、30号溝に切られている。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は南壁断面で7層に分けられた。2層はにぶい黄褐色粘土質シルト、3～5層は灰黄褐色シルト、6層は灰黄褐色粘土質シルト、7層はにぶい黄褐色粘土質シルトからなる。出土遺物には土師器及び須恵器の破片が19点ある。



層位	土色	土質	その他
B a	10Y R 5/1 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を少量含む
A	10Y R 5/1 にぶい黄褐色	砂質シルト	酸化鉄を含む 粘性が強い
B	10Y R 5/1 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む
C	10Y R 5/1 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む 粘性あり
a	10Y R 5/1 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を含む 粘性あり
b	10Y R 5/1 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む
1	10Y R 5/1 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む
2	10Y R 5/1 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を多量に含む しまりが悪い
3	10Y R 5/1 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む 粘性あり
4	10Y R 5/1 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を多量に含む しまり有り
5	10Y R 5/1 灰黄褐色	シルト	酸化鉄を含む しまり有り
6	10Y R 5/1 灰黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む しまり有り
7	10Y R 5/1 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む

第59図 42号溝土層断面図

写真33
42号溝断面



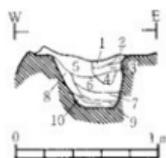
(28) 43号溝

〔形態、規模、方向〕 調査区北東角付近で東壁から北壁に向かって直線的に伸びて検出された。上面幅50cm、底面幅25cm、深さ32cmを計り、断面形は逆台形を呈す。方向はN-32°-Wを指す。底面は北西側が約3cm低くなっている。方向、規模、断面形等から、23号溝の延長と考えられる。

〔重複〕 2号性格不明遺構より古いと考えら



写真34 43号溝断面



第60図 43号溝土層断面図

れる。

〔堆積土、出土遺物〕 堆積土は10層に細分された。1層は黄褐色シルト、2、6、9層はにぶい黄橙色シルト、3層は褐色粘土質シルト、4、7層はにぶい黄褐色シルト、5層は褐色シルト、8、10層はにぶい黄褐色シルトからなる。出土遺物はない。

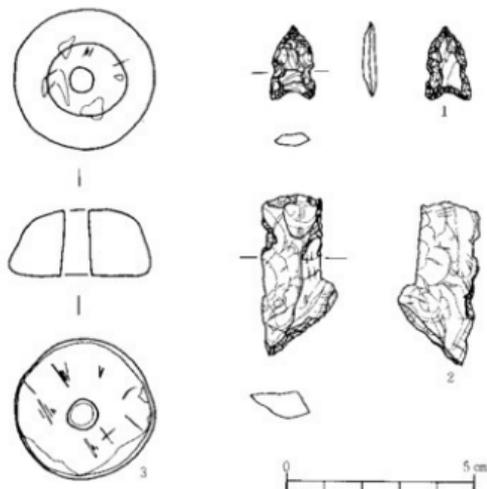
層序	土色	土質	その他
1	10YR 5/6 黄褐色	シルト	マンガン粒を含む
2	10YR 5/6 にぶい黄橙色	シルト	マンガン粒を含む
3	10YR 5/6 褐色	粘土質シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む
4	10YR 5/6 にぶい黄褐色	粘土質シルト	
5	10YR 4/6 褐色	シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む
6	10YR 5/6 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄のブロックを含む マンガン粒を含む
7	10YR 5/6 にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む
8	10YR 5/6 にぶい黄褐色	シルト	マンガン粒を含む
9	10YR 5/6 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄を含む しまりなし
10	10YR 5/6 にぶい黄褐色	シルト	酸化鉄 マンガン粒を含む しまりなし

VI. 遺物・遺構の総括

1. 遺物の総括

(1) 石器

石器類には、第61図に示した石鏃と二次加工痕のある剥片がある。第61図1の石鏃は、23号溝から出土したもので、長さ20mm、幅12mm、厚さ3.5mmを計るアメリカ型のもので、白色を呈する。2の二次加工痕のある剥片は、長さ44mm、幅20mm、厚さ7.5mmを計る。2点の石器の他には少数の剥片が出土している。これらの石器は、南小泉



第61図 石器・石製品実測図

遺跡としては最古の時期と考えられている弥生時代に属するものと思われる。

(2) 弥生土器

弥生土器は全て小破片で、11点出土している。出土地点はⅡb層から5点、27号溝から5点、18号住居跡カマド埋土5層中より1点出土している。文様としては、押し引き列点文のあるものが1点あるだけで、他はL R縄文または摺糸文が施されているだけである。

(3) 土師器

土師器は図化できるものは5点だけであるが、ロクロを使用しないものと、ロクロを使用したものに大別される。

①ロクロを使用しない土師器

ロクロを使用しないものには、小形甕(埴)1点と甕が2点ある。

〈埴〉 6号土壇から出土した第12図1に図示したもので残存高6.5cm、口径6.6cm、体部径7.6cmを計る。外面は磨滅しているが、内面には体部にナデ痕跡、口縁部にヨコナデが認められる。南小泉式または引田式と考えられるが、南小泉式に比べると体部に比して口縁部が径、高さともにやや小さく作られている。

〈甕〉 一 17号住居跡より出土した第8図1に図示したものは、器高18.1cm、口径16.8cm、底径7.9cmを計る。底部は器高の大きさに比してやや大きく偏平な造りで、底部と体部との接続部は段状の折曲はみられず、一形を呈す。最大径は口縁部にあり、体部最大径はその上半にある。口縁部と体部の境はわずかにくびれ、口縁部は短かく、「く」字状に外反する。器面調整は、体部外面上半がナデ、下半がヘラケズリ、体部内面はヘラナデ、口縁部は内外面ヨコナデによる。

〈甕〉 二 17号住居跡より出土した第8図2に示したもので、器高14.8cm、口径13.6cm、底径7.1cmを計る。この甕も器高に比して底径が大きい。底部と体部の境はわずかに折曲するが、底部は台状を呈せずに偏平な造りとなっている。最大径は体部上半にあり、口縁部と体部の境は大きくくびれ、口縁部は短かく、強く外反している。器面調整は、体部外面がハケメ後下端部がヘラケズリされ、体部内面はヘラナデ、口縁部はヨコナデされている。

甕1、2とも底部には木葉痕が認められる。

甕1、2の編年の位置については、このような甕と類似する特徴を有するものが高清水町西手取遺跡2号住居跡(註1)、古川市藤屋敷遺跡18号住居跡(註2)、白石市青木遺跡21号住居跡(註3)、白石市家老内遺跡1号住居跡(註4)等で、底部に回転糸切り痕を有するロクロ土師器の環と共伴していることから、表杉ノ入式期に属するものと考えられる。

②ロクロ使用土師器

ロクロを使用したものには、18号住居跡カマド内から出土したもの（第10図1）と10号土塚から出土したもの（第19図1）の2点がある。18号住居跡の甕は体部の下半部を欠損するが、上半部は10号土塚出土のものに類似する。10号土塚のものは、いわゆる長胴形を呈し器高27.9cm、口径21.2cmを計り、体部最大径と口径はほぼ等しい。体部上半は内外面ともロクロ調整されるが、底部付近は外面がヘラケズリ、内面がヘラナデにより調整される。

2点とも表杉ノ入式期に属するものである。

（4）須恵器

須恵器で実測可能なものは、杯3点、甕2点、壺1点の計6点である。

〈杯〉 完形のものにはビット9出土の1点（第25図2）だけで、他はS X 1出土の口縁部片（第27図1）とS X 2出土の底部片（第28図1）である。ビット9出土品は底部回転系切り無調整で、体部から口縁にかけては直線的に外傾する。S X 2出土品は外側に張り出す高台が付く。

〈甕〉 17号住居跡から出土した底部から体部下半にかけての破片（第8図3）と、S X 1出土の口縁部片（第27図2）が実測できた。

17号住居跡出土品は、外面が平行叩き目後体部下端がヘラケズリされ、内面はヘラナデ調整されている。S X 1出土品は頸部が外反し、口縁部が強く外反するもので、端部は単純に外面に向けて平坦につくられている。内外面ともロクロ調整されるが、外面には平行叩き目痕も残っている。

〈壺〉 ビット9出土品で、扁平な球形の体部に外側に張り出した高台が付く。口頸部は欠損するが、長頸壺であったと考えられる。体部外面には肩部から底部に至るまで、ロクロ回転によるヘラ削り痕を有する。体部の行程の範囲には自然釉が付着し、体部上半部にはほぼ等間隔のメケ所に円形の剝離痕がある。

出土須恵器の年代については、17号住居跡出土甕は、共伴する土師器から表杉ノ入式期と考えられる。

ビット9出土の杯は、岡田茂弘・桑原滋郎氏の「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」（註5）による分類では6-6類に相当し、8世紀末から9世紀の年代が与えられている。また、最近の白鳥良一氏による「多賀城跡出土土器の変遷」による分類では、C群土器の年代は8世紀末から9世紀中葉の年代が与えられている（註6）。共伴の壺についてもこの年代に属するものであろう。

(5) 石製品

石製品としては、27号溝から出土した紡錘車と、6号土城（井戸）より出土した石臼片が各1点ある。

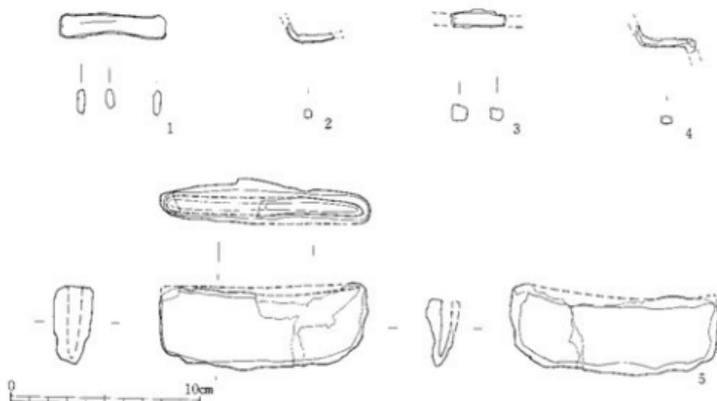
〈紡錘車〉 第611図3に示した円錐台形を呈し、孔径は底面径が上面径よりわずかに大きくなっている。蛇紋岩製で、全面が丁寧に研磨されている。

石製で、しかもこのような形状を呈する紡錘車は、栗遺跡（註7）や清水遺跡（註8）から出土しており、両遺跡の出土品の年代は、栗園式期の年代が与えられているので、本遺跡出土品の年代も栗園式期（7世紀代）と考えられる。

〈石臼〉 茶臼の下臼の周縁部付近の破片と考えられる長さ5cm、幅3.5cmの破片である。安山岩製で、厚さが2.5～3cmある。

(6) 鉄製品

鉄製品としては、第62図に示したように、板状のもの(1)と、断面方形の釘状のもの(2～4)、鋸先(5)がある。



遺物No.	種別	遺構名	層位	長さ		写真掲載
				cm	mm	
1	?		表土	5.6	1.3	
2	釘?		II a 層	2.6	0.5	
3	釘?	SD-16	1～2層	2.9	0.9	
4	釘?	P1445		3.1	0.4	
5	鋸?	SD-33		4.2	11.1	37-1

第62図 鉄製品

〔鉄先〕 幅11.1cm、長さ4.2cm、厚さ2.1cmを計る。断面形はV字状を呈し、木部挿入口の内法幅は6mm前後となっている。

鉄製品の他に、鉄滓が1・2号性格不明遺構・27号溝・表土中より出土している。

(7) 古瓦

古瓦は表土中より丸瓦片6点、平瓦片2点、不明片4点、6号土壌より平瓦片2点が出土した。図示したものは、6号土壌出土の平瓦片1点だけである。6号土壌出土の2点は、凸面縄叩き目、凹面布目痕を有する一枚造りのものである。表土中出土のものは、平瓦、丸瓦とも凹面は布目痕を有し、凸面は縄叩き目のものと、縄叩き目の後ナデ調整されるもの、ナデ調整だけのもの(丸瓦片)がある。

出土した瓦は、多賀城や陸奥国分寺跡出土品と同類のもので、奈良時代から平安時代のものと考えられる。

(8) 近世瓦

近世の瓦類は6号土壌の1～5層中から一括して11点出土している(第13、14図)。

〔丸瓦〕 7点出土している。凸面はナデ調整、凹面は布目痕を有し、部分的にヘラケズリされている。両側面及び両端面は、接合面とその内側に二面の面取りがされている。

丸瓦のうち1点には、玉縁との境の段土から6cm程の所に直径1.2cmの釘穴の穿たれているものもある(第13図1)。

〔平瓦〕 2辺間の長さのわかるものはなく全て小破片である。凸面、凹面ともナデ及び一部ケズリによって調整される。側面及び端面は1面となっているものが一般的であるが、第14図では、側面の凹面側角が2度のケズリによって面取り状に丸味をもって仕上げられている。

丸瓦、平瓦ともやや砂を多く含むが、表面は滑らかに仕上げられている。焼成は、古代の瓦一般に比べるとやや軟質で、いわゆる鹽し焼きによる瓦である。色調は、表面1mm前後が黒色から黒味を帯びた銀色を呈し、内部は灰白色を呈するものが大部分であるが、表面までも灰白色を呈するものもある。

これらの瓦は、仙台城や陸奥国分寺薬師堂から出土するものと同質のものである。仙台城は伊達政宗が慶長5年(1600年)に縄張りし、翌6年に普請を始めており、陸奥国分寺薬師堂は慶長十二年(1607年)に再興されている。また、寛永5年(1628年)には若林城が完成している。本遺跡出土の近世瓦が、どのような状態のものがいつこへ運ばれ、さらに井戸へ廃棄されたかは不明であるが、仮に上記の二城、一寺の築造時に近い時期にこへ運ばれてきたとすれば、江戸時代初期の年代が与えられる。この年代については共伴の陶器類の年代とも大差な

いと考えられる。

(9) 陶 器

陶器は6号土城から出土した無軸の擂鉢2点と施釉の皿1点の計3点がある。

①無軸陶器

〈擂鉢〉—1 第12図3は、器高10.2cm、口径21.2cm、底部径7.4cmを計り、かなり使用され磨滅している。筋目は幅1.8cmに5本と荒く、また単位間の間隔も広い。口唇部は平頭となっており、内外面ともわずかに肥厚する。二次的な火を受けて内外面とも器面が荒れているが、煙し焼きによるものと考えられる。須恵器や中世陶器の一般と比較して、焼きはやや軟質で、前記の近世瓦に類似する。

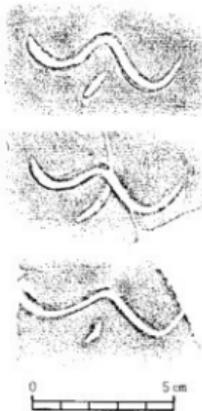
〈擂鉢〉—2 第12図4は口径31cmで、底部を欠損する。内外面ともロクロ調整されているが、外面はロクロ調整により生じた凸部をヘラ状工具によって削るようにナデている。筋目は幅2.0cmに5本と荒く、また単位間の間隔も広い。口唇部は平出となっており、内外面両方向に肥厚する。口唇部と筋目との中間には、ヘラによる文様が、ある間隔を置いて描かれている。Wの中央頂部の下に短い斜線を引いたもので、第12図4に2ヶ所と他の同一個体片に1ヶ所の計3ヶ所に認められている。第63図は文様の拓影である。この文様は飛んでいる鳥を表現していると思われる。

この擂鉢も煙し焼きによるもので、表面は黒色を呈するが、内部にはふい黄橙色を呈す。焼成は、前記の擂鉢と同様である。

②施釉陶器

〈皿〉 第12図2は、器高3.6cm、口径13.6cm、底径5.4cmを計り、底部の高台は造り出しによる。底部から口縁部にかけては緩やかに立ち上がり、口縁部は軽く外反する。口縁部の内面には軽い段が形成される。釉は半透明の灰オリーブ色を呈し、内面と外面上端部にかける。

陶器類の年代は、共伴の瓦類との関係からみて、江戸時代のものと考えられる。江戸時代のどのくらいの時期に相当するかについては判断ができる資料はないが、その初期的な様相が強いように思われる。



第63図 6号土城(井戸跡)
出土擂鉢ヘラ描き文様拓影

2. 遺構の総括

(1) 住居跡

住居跡は2軒検出された。両住居跡とも表杉ノ入式期（平安時代）のものである。住居跡の規模は、17号が約3m四方、18号が約4m四方と比較的小型であり、両住居跡とも竪穴内における柱穴は検出されていない。床面にはカマド以外には周溝、貯蔵穴といった施設はなく、数個の用途不明のピットが検出されるだけである。

カマドは両住居跡とも北側の壁面に接して付設され、住居跡の外に煙道が伸びている。17号住居跡のカマドの場合は北壁の中央よりやや東寄りに付設されている。

住居の主軸の方向をカマドによって計測すると、17、18号住居跡とも真北を基準として、N-9°-Wを向いている。（磁北基準N-2°-W）

(2) 土 壙

土壙は7基検出されたが、このうち6号土壙は井戸跡であることがわかった。他の土壙については、10号土壙の年代が出土土師器によって表杉ノ入式期（平安時代）と判明しているだけで、年代、性格についても不明であり、土壙の相互関係もないようである。ただし、12号土壙は17号住居跡に切られている小溝状遺構より古いものであることから、平安時代以前の土壙であることは明らかである。

ほぼ完形の土師器甕を出土した10号土壙についてみると、甕は底面近くから横転した状態で出土し、甕の中には土が充満していた。甕の中の土は、甕の横断方向一横転した状態では垂直方向一で2層に分けることができた。このことは、甕の中に土が詰った状態で埋められたことを示していると考えられる。土壙に甕を埋める例としては甕棺があるが、甕棺の場合は、中が空洞であるため土圧によって潰れ、甕内に土が入っていないことからすると、本例は甕棺とは別ようである。

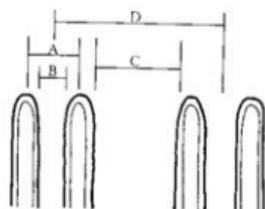
(3) 井戸跡

6号土壙は調査の結果井戸跡であることが明らかになった。平面形は直径約2mの円形を呈す。断面形は、本来は縦長の逆台形であったと考えられるが、下半部の壁が崩落し、フラスコ状を呈す。井戸枠施設はなく、素掘りの井戸である。瓦、陶器等の出土遺物により近世と考えられる。この井戸に関係すると思われる建物等については発見することができなかった。

(4) 小溝状遺構

本調査発見の小溝状遺構は、先述したように2条1組となっている。その関係を表としたのが第1表である。対内の内壁間の距離は、EW 2-3間は60~70cmとやや広いが、他は20~40cmの間隔となっている。これに対し、対間の外壁間の距離は、EW 6-7とEW 8-9間がやや広く130~150cmとなっているが、他は70~120cmとなり、対内の内壁間距離の2~5倍となっている。このことは、明らかに2条1組となるように、そして組と組の間には、組間よりも広い間隔をとるように意識的に掘られたことを意味している。なお、間隔の広い2条が対となるのではなく、間隔の狭い方が組になることは、その配置から明らかであり、かつ対間の外壁間距離よりも対内の内壁間距離の方に統一性があることから考えられる。

小溝状遺構は、仙台市内においてもこれまでに、安久東遺跡(註9)、六反田遺跡(註10)、山口遺跡(註11)、南小泉遺跡中央部(註12)で発見されている。安久東遺跡の場合は平安時代の住居跡に切れ、5世紀後半頃の木棺墓及び箱式石棺墓を切っている。山口遺跡では古墳時代から奈良時代にかけての地層で発見されている。これまでの発見例では、本例も含め、平安時代



第1表 小溝状遺構計測表

計測位置略図

小溝状遺構番号	対 内		対 間	
	A. 中軸間距離	B. 内壁間距離	C. 外壁間距離	D. 中軸間距離
N S 1-2	60	30		
↓両対間距離			70	
N S 3				
E W 2-3	90	60~70		
↓両対間距離			70~100	180
E W 4-5	45~70	20~40		
↓両対間距離			100~120	200
E W 6-7	50	25~30		
↓両対間距離			130~150	220
E W 8-9	60~70	30~40		
NW-S E 1-2	60	40		

の住居跡に切られる場合があっても、これを切っている場合がないことから考えると、时期的には平安時代よりは古いものと考えられる。市内でこれまでに発見された小溝状遺構はほぼ等間隔に列状に並ぶ場合が多く、本例のように2条1組となるような例はなかった。

小溝状遺構の機能としては、六反田遺跡では天地返し(畑地)の可能性を含めた作物栽培に関する遺構と考えており、また、このような遺構を広範囲に調査した群馬県高崎市芦田貝戸遺跡では「形状からしていわゆる畑として何かを栽培した可能性は高く……中略……畝の上面を

乾燥させるために溝を掘って同時に土壌の酸化を促がしていたのか……。」(註13)と考えている。本調査区の小溝状遺構も他の類例から如に関係する遺構と考えられる。この場合、畝を作るための掘り込みなのか、単なる天地返しなのか、それとも畝を乾燥させるための排水用の溝であったのかは明らかではない。しかし、畝を作ることを目的としてできた溝状の掘り込みであるならば、本例のように畝の間隔の広いものは、畝と畝との間隔がある程度の幅がなければならぬものが栽培されていたものと考えられる。

(5) ビット

ビットのうち、須恵器の坏と壺を出土したビット9についてみると、坏はビットの底面に接し、壺は坏の上に整然と重ねられていた。このことは、これら2点の土器が単にビット中に捨てられたものとは考えられない。しかしながら、坏は口縁の一部が欠損し、壺は口頸部全てと台のほとんどが欠損しているものであることからすれば、2点の土器はその機能を十分に果たさなくなっていたものであることもまた確かである。この遺構の性格については、现阶段では明らかではない。

(6) 性格不明遺構

1号性格不明遺構は、方形の堅穴状を呈し、周辺部には多数のビットがみられる。床面上からの出土遺物はなく、堆積土中から多くの遺物が出土しているが、いずれも古代に属するものである。重複遺構中では、数個のビットを除いては最も新しい遺構であるが、時期としては、ロクロ土器出現後の古代(平安時代)に属すると考えられる。堆積土中の出土遺物にあっては鉄滓が15点とフイゴ羽口が1点出土しており、小鍛冶との関係を考えさせるが、この遺構内からは焼土を伴う施設や、焼土・炭等が検出されていないので、小鍛冶との直接的な関係はないと思われる。

2号性格不明遺構は、大部分は調査区外であるので、その全容は明らかでないが、土塊状の落ち込みと考えられる。年代としては、堆積土中及び遺構の上部堆積土中に中世以降の遺物がなく、古代の遺物が多量に含まれていることから、ロクロ土器出現以降の古代(平安時代)と考えられる。この遺構の堆積土中からも鉄滓とフイゴ羽口が出土しており、1号性格不明遺構と同様に小鍛冶との関係が考えられるが、決定的な資料はない。この遺構の周辺は遺構の埋没後も窪地であったようで、遺物を多量に含む土砂が堆積している。

(7) 溝

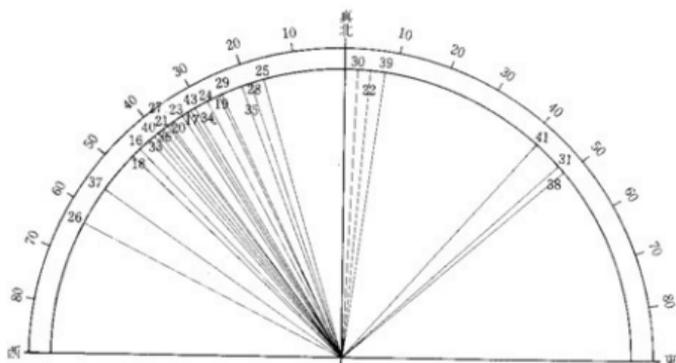
本調査区においては27条の溝が検出された。これらの溝のうち、38・39・40号溝は平安期の

竪穴住居跡との重複関係によって、平安時代以前の年代が考えられ、29号溝は6号土城(井戸)

第2表 溝観察表

方 向	傾 斜	上 幅	底 幅	深 さ	断面形	時 期	
16	N-45°-W	わずかに南が低い	138	118	12	浅い逆台形	
17	N-33°-W	—————	84	70	20	舟底形	
18	N-47°-W	—————	47	20	11	舟底形	
19	N-26°-W	NW-10°SE	55	45	5-20	舟底形	
20	N-37°-W	—————	135	120	10	浅い逆台形	
21	N-39°-W	—————	25	18	8	舟底形	
22	N-5°-W	—————	18	12	5	舟底形	
23	N-34°-W	—————	44	34	36	逆台形	
24	N-28°-W	NW-10°SE	35	20	6	浅い逆台形	
25	N-16°-W	NW-10°SE	43	30	30	逆台形	
26	N-63°-W	NW-13°SE	36	26	14	逆台形	
27	N-38°-W	NW-4°SE	65	35	35	逆台形	
28	N-19°-W	—————	20	14	6	舟底形	
29	N-25°-W	—————	68	30	23	舟底形	江戸以前
30	N-2°-W	SW-5°NE	65	30	45	舟底形	
31	N-43°-W	—————	80	55	28	舟底形	
32	欠番						
33	N-42°-W	NW-20°SE	62	45	31	U字形	
34	N-31°-W	NW-10°SE	185以上	40	85	逆台形	
35	N-26°-W	—————	50	30	50	U字形	
36	N-40°-W	西壁部浅い	50	30	15	舟底形	
37	N-55°-W	—————	26	16	8	舟底形	
38	N-50°-W	—————	40	25	15	舟底形	平安以前
39	N-8°-W	SW-5°NE	36	20	7	浅い逆台形	平安以前
40	N-41°-W	NW-10°SE	41	34	18	U字形	平安以前
41	N-41°-W	—————	42	5	14	V字状	
42	不明	不明	140以上	不明	不明	不明	
43	N-32°-W	NW-3°SE	50	25	32	逆台形	

第3表 溝方向グラフ



との重複関係により江戸時代以前の年代が考えられるが、他の多くの溝については年代の位置付けに足る資料を得ることが出来なかった。したがって古代のものであるか、あるいは中世・近世のものであるかは不明であるが、遺物を出した16・19・20・23・27・28・29・33・34・35・40・42号溝の資料を見ると、土師器・須恵器の類が大部分で、中世以降の遺物は見ることができない。

溝の規模について一覧表にしたのが第2表である。この表により規模から溝を下記のように分類することができる。

大型a = 上面幅が1mを超える溝で、深さが20cm以下と浅いもの。

[16・20号溝]

大型b = 上面幅が1mを超える溝で、深さが50cm以上と深いもの。

[34・42号溝]

中型 = 上面幅が1m以下40cm以上の溝

[17・18・19・23・25・27・29・30・31・33・35・36・38・40・41・43号溝]

小型 = 上面幅が40cm未満の溝

[21・22・24・26・28・37・39号溝]

この分類によれば、大型・小型の溝は少なく、中型の溝が多い。大型の溝は、重複関係において、浅いものは比較的新しく（SD16・20）、深いものは古い（SD34・42）傾向が認められる。小型の溝は検出される長さの短いものが多い。（SD21・28・37）

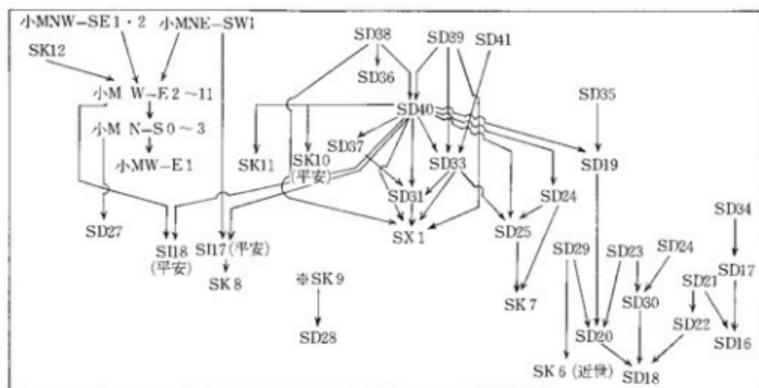
溝の方向としては、第2表及び第3表のグラフに示したようにN-15°～50°-W（北北西～北西）を指す溝18条が大部分を占め統一性が感じられる。他の方向としては、北と北東の溝がそれぞれ3条と西北西の溝が2条だけである。

溝両端の底面の傾斜は、第2表のように、傾斜のあるものと、ほとんど平坦なものとは約半々で、傾斜のあるものも33号溝を除くと10cm以下と差は小さく、平坦に近いものである。傾きとしては、北西が下がる溝が6条、南東が下がる溝が3条と、両方向のものがあり、自然地形等による傾向は認められない。

Ⅶ. ま と め

1. 本調査区は、南小泉遺跡の南端部に位置するが、竪穴住居跡・土城・井戸跡・小溝状遺構・溝・ピット等多数の遺構が発見され、遺構はさらに南側にも広がっている可能性が考えられるようになった。
2. 発見遺構で、年代の明らかなものは、平安時代より古い小溝状遺構・平安時代の竪穴住居跡2軒・土城1基・ピット1個・平安時代前後の多数の溝・江戸時代の井戸跡1基がある。年代の明らかな遺構のなかでは、平安期に属するものが多い。
3. 出土遺物としては、古い方から石鏃・スクレイパー・弥生式土器・古墳時代の石製紡錘車・古墳時代～平安時代の土師器・平安時代の須恵器・古代瓦・近世瓦・近世の施釉及び無釉陶器がある。また時期は明らかでないが鍬・鉄滓・フイゴ羽口・石臼片も出土した。出土遺物のなかで、数的に最も多いのが土師器で、土師器のなかでも平安期と考えられるのが大部分を占め、古墳時代のものは少ない。
4. 発見された遺構には多くの重複関係があり、これをまとめると第4表のようになり、平安時代以前より近世に至るまでの人々の生活の跡が連続として続いて来たことが窺われる。

第4表 発見遺構重複関係一覧表



註 記

- 註1 早坂春一・阿部 恵：「西手取遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第63集 宮城県教育委員会（1980）
- 註2 加藤道男・佐藤好一：「藤屋敷遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』第63集 宮城県教育委員会（1980）
- 註3 小川淳一：「青木遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』第71集 宮城県教育委員会（1980）
- 註4 真山 悟：「家老内遺跡—東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第81集 宮城県教育委員会（1981）
- 註5 岡田茂弘・桑原滋郎：「多賀城周辺における古代埴形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ 宮城県多賀城跡調査研究所（1974）
- 註6 白鳥良一：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅱ 宮城県多賀城跡調査研究所（1980）
- 註7 東北学院大学考古学：「栗遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第14集 仙台市教育委員会（1979）
- 註8 丹羽 茂・小野寺祥一郎・阿部博志：「清水遺跡—東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ」『宮城県文化財調査報告書』第77集 宮城県教育委員会（1981）
- 註9 仙台市教育委員会：第1回・第2回「安久東遺跡現地説明会」資料 仙台市教育委員会・宮城県教育委員会（1977）
- 註10 田中則和・柳沢みどり：「六反田遺跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第34集 仙台市教育委員会（1981）
- 註11 仙台市教育委員会：「山口遺跡現地説明会資料」 仙台市教育委員会（1982）
- 註12 結城慎一・工藤哲司：「南小泉遺跡範囲確認調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第13集 仙台市教育委員会（1978）
- 註13 田村 孝・小野和之：「芦田貝戸遺跡Ⅱ」『高崎市文化財調査報告書』第19集 高崎市教育委員会・高崎市文化財保護協会（1980）

① 表土 (I 層)

出土地点		表				土				計
種別	器種	須恵器	須恵器	瓦	瓦	鉄製品	鉄製品	計		
器種	埴	甕	埴	甕						
破片数	74	187	20	21	13	8	2	8	333	

② II a 層

出土地点		II a 層				計
種別	器種	須恵器	須恵器	瓦	鉄製品	
器種		埴				
破片数	32	207	6	2	1	248

③ II b 層

出土地点		II b 層		計
種別	器種	須恵器	須恵器	
器種	埴	甕		
破片数	85	2		87

④ 17号住居跡

種別	土 器										計		
	器種	埴	甕							須恵器			
部位	体	位	体							体			
調整	外面	内面	口縁部	体部			体部			体部			
調整	外面	内面	ヘリナデ	ヘリナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ハケ目	ハケ目	不明	不明	タタキ目	ヘリナデ
層位	1			1	1						7	1	
層位	床		2	1	2	3	1	5	1	1	10		
計	1	2	2	3	3	1	5	1	1	17	1	37	

⑤ 18号住居跡

種別	土 器				発生土器	計
	器種	埴	甕	甕		
部位	底	体	底	体		
調整	外面	内面	ナデ	ナデ		
調整	外面	内面	ナデ	ナデ		
層位	カマド埋道		5			
層位	カマド5		6	1		
層位	カマド6		3		1	
層位	床	1			1	
層位	ビット6		1			
計	1	15	1	1	1	21

⑥ 6号土壌

種別	土 器										瓦	鉄製品	銅製品	石製品	計
	器種	埴	甕	甕	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦					
部位	口縁部	体部							口縁部	体部					
調整	外面	内面	口縁部	口縁部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部	体部
調整	外面	内面	ヘリナデ	ヘリナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明
層位	1~2														
層位	3	1	2	3	1			5							
層位	1~4								3	16	7		4	1	
層位	1~6								1	1	7		7	1	
計	1	2	3	1	1	1	5	1	1	16	7	1	7	1	50

⑦ 11号土壌

種別	土師器		計
器種	環	壺	
部位	体部	体部	
調整	外面	内面	不明
層位	1	1	
計	1	1	2

⑧ 12号土壌

種別	土師器		計
器種	環	壺	
部位	体部	体部	
調整	外面	内面	不明
層位	1		
計	1	1	2

⑨ 小溝状遺構群

種別	土師器		計
器種	環	壺	
部位	体部		
調整	外面	内面	不明
層位	南北	1 5	1 1
東西		1	
計	1	7	1 1 10

⑩ ビット9

種別	土師器		計
器種	環	壺	
部位	体部	体部	
調整	外面	内面	不明
層位	2	7	
計	2	7	9

⑪ 1号性格不明遺構

種別	土師器											計				
器種	環	壺				須恵器		土製品		瓦	鉄滓					
部位	体部	口縁部	体部		底部		胴部	底部	底部	羽1						
調整	外面	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	不明					
層位	1-3	9	2	2	6	4	15	16	9	1	1	3	1	1	4	15
計	9	2	2	6	4	15	16	9	1	1	3	1	1	1	4	15

⑫ 2号性格不明遺構

種別	土師器											計				
器種	環		高台器		壺		須恵器		土製品		瓦					
部位	体部		高台部		体部		胴部		体部							
調整	外面	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	不明					
層位	A-F層	3	26	27	1	1	3	2	10	12	1	1	4	1	1	6
層位	1-5層				1											
計	3	27	27	2	1	3	2	11	14	1	1	4	2	1	6	

種別	土師器											計			
器種	環		壺		須恵器		土製品		瓦						
部位	体部	底部	体部		胴部		体部		体部						
調整	外面	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明					
層位	A-F層	1	48	4	2	1	1	15	1	1	7	1	6	1	1
層位	1-5層								2	1				3	
計	4	48	4	2	1	1	17	1	1	1	7	1	9	1	1

種別	瓦		土製品		計
器種	丸瓦	平瓦	瓦口	鉄滓	
部位	外面	裏面			
調整	外面	裏面			
層位	A-F層	2	4		
層位	1-5層			2	6
計	2	4	2	6	211

⑬ 16号溝

種別	土師器		計
器種	環	壺	
部位	体部		
調整	外面	内面	
層位	1-2	1	
計	1	1	

⑭ 19号溝

種別	土師器					計	
	器種	環	甕				
部位	口縁部	体部	底部				
調	外面	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	不明	
整	内面	不明	不明	不明	不明	不明	
層位	不明	1	2	1	1	1	
計		1	2	1	1	1	7

⑮ 20号溝

種別	土師器					計			
	器種	環	甕						
部位	口縁部	体部	底部						
調	外面	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	不明			
整	内面	不明	不明	不明	不明	不明			
層位		1	1	3	2	1	2	1	
計		1	1	3	2	1	2	1	11

⑯ 23号溝

種別	土師器		計	
	器種	甕		
部位	体部			
調	外面	不明		
整	内面	不明		
層位		1	1	
計		1	1	2

⑰ 27号溝

種別	土師器					須恵器		鉄器		石製品		計	
	器種	環	甕			環	甕	鉄滓	鉄鏝	石鏝			
部位	口縁部	体部	体部			体部	底部	体部					
調	外面	不明	不明	ナデ	ナデ	ハケ目	ハケ目	ロクロ	不明				
整	内面	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明				
層位	1-2	1	2	1	2	1	1	1		3	1		
		3						1		2	1		
計		1	2	1	2	1	1	1	1	5	1	1	17

⑱ 28号溝

種別	土師器			須恵器		瓦		計	
	器種	環	甕	瓦	平瓦				
部位	口縁部	体部	体部	体部	体部				
調	外面	ナデ	ナデ	ハケ目	ロクロ	ナデ	横目		
整	内面	不明	不明	不明	不明	不明	不明		
層位		1	2	1	2	1	1	1	
計		1	2	1	2	1	1	1	9

⑲ 29号溝

種別	土師器		計
	器種	甕	
部位	体部		
調	外面	不明	
整	内面	不明	
層位		1	
計		1	1

⑳ 33号溝

種別	須恵器		計
	器種	甕	
部位	体部		
調	外面	不明	
整	内面	不明	
層位		1	
計		1	1

㉑ 34号溝

種別	土師器			計	
	器種	環	甕		
部位	口縁部	体部	体部		
調	外面	不明	不明		
整	内面	不明	不明		
層位		2	1	2	
計		2	1	2	5

㉒ 35号溝

種別	土師器			計	
	器種	甕	部		
部位	体部				
調	外面	ナデ	ハケ目	不明	
整	内面	不明	不明		
層位		1	1	1	
計		1	1	1	3

㉓ 40号溝

種別	土師器					計			
	器種	環	甕						
部位	口縁部	体部	体部						
調	外面	ナデ	不明	不明	不明	不明			
整	内面	不明	不明	不明	不明	不明			
層位		2	1	1	1	4	1	1	
計		2	1	1	1	4	1	1	11

㉔ 42号溝

種別	土師器					須恵器		計					
	器種	環	甕			環	甕						
部位	口縁部	体部	底部	体部	体部	体部	底部						
調	外面	ナデ	不明	不明	不明	不明	不明						
整	内面	不明	不明	不明	不明	不明	不明						
層位	白色土	1	1	1	2	2	1	1	1	2	5	2	
計		1	1	1	2	2	1	1	1	2	5	2	19



写真35 調査区全景(南より)



写真36 調査区全景(北より)



写真37 調査区南東部(北より)



写真38
17号住居跡全景
(南より)

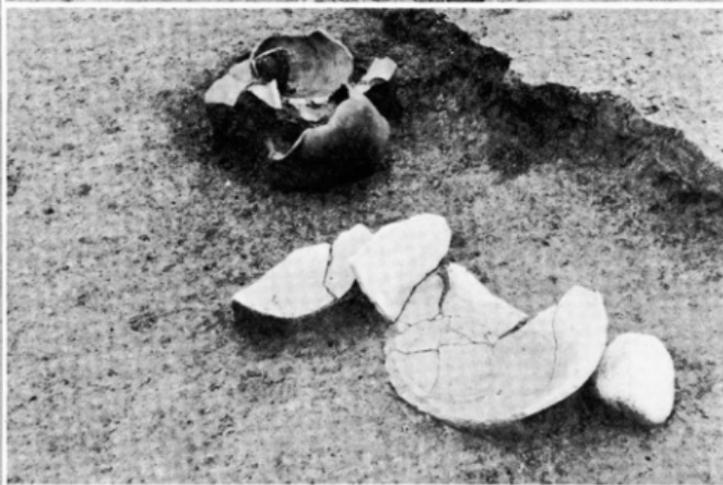


写真39
17号住居跡遺物出土状況
(南西より)



写真40
18号住居跡全景
(南より)

写真41
18号住居跡カマド
(南より)



写真42
1号性格不明遺構
(南東より)

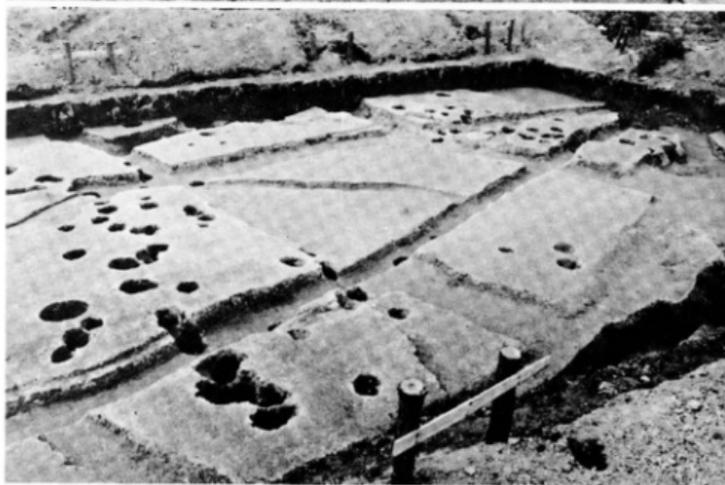


写真43
2号性格不明遺構
(北西より)





写真44
6号土壇(井戸跡)
(西より)

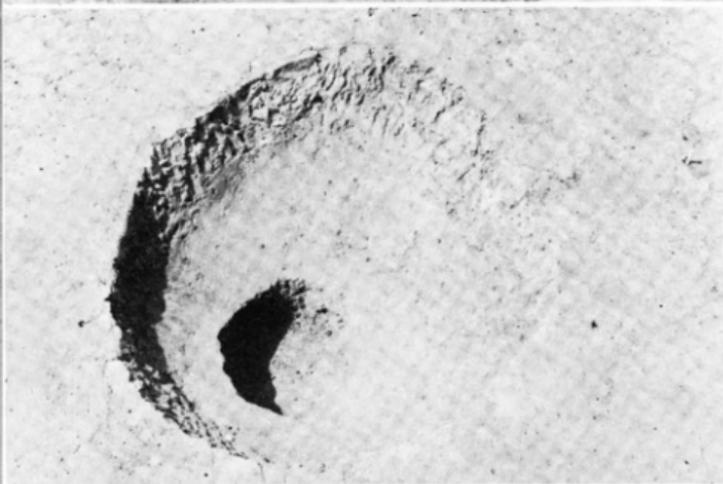


写真45
7号土壇
(南より)



写真46
9号土壇
(北より)

写真47
10号土壌
(南より)



写真48
11号土壌
(南より)



写真49
12号土壌
(東より)





写真50
ピット50
(西より)



写真51
小溝状遺構
(南より)

写真52
16・22・34号溝
(南より)



写真53
28号溝及び
9号土壇確認状況
(北より)



写真54
23・30・42号溝
(北より)





1



4



2



5



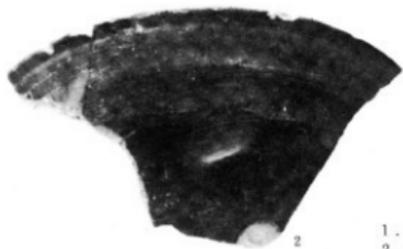
3



6

1. 土師器・甕(SI-17 出土)
2. 土師器・甕(SI-17 出土)
3. 土師器・甕(SK-10 出土)
4. 須恵器・杯(ビット9 出土)
5. 須恵器・甕(ビット9 出土)
6. 須恵器・甕(SI-17 出土)

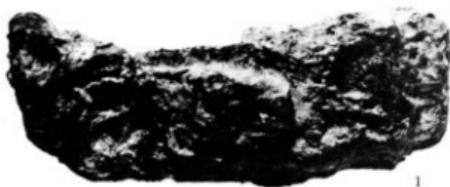
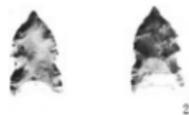
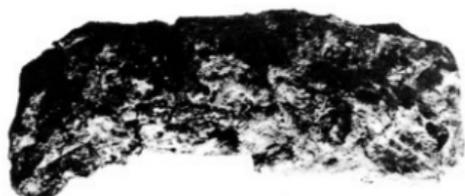
写真55 出土遺物1



1. 黒釉陶器・播鉢・内面(SK-6 井戸跡出土)
 2. 同 外面(同)
 3. 黒釉陶器・皿 (SK-6 井戸跡出土)
 4. 近世瓦・丸瓦・凸面(SK-6 井戸跡出土)
 5. 同 凹面(同)



写真56 出土遺物2



1. 鉄製器・鉄 (SD-33 井戸)
2. 石 鏃 (SD-23 井戸)
3. 石製紡錘車 (SD-27 出土)
4. 近世瓦・丸瓦・凸面(SK-6 井戸跡出土)
5. 同 凹面(同)



写真57 出土遺物3

付1 仙台市周辺の窯跡および遺跡出土土器の胎土分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

1. はじめに

粘土を1350℃もの高温で焼成しても、化学組成に変動がないことが確かめられているので、窯跡から出土する須恵器胎土を分析することによって、その窯で生産された須恵器胎土の化学的特性を知ることができる。そしてそのデータを遺跡から出土する須恵器の胎土分析の結果と対応する窯、または地域がその産地と考えられる訳である。筆者はこの方法で各地の遺跡出土須恵器の産地を数多く推定した。また、全国各地の多数の窯跡から出土する須恵器を分析した結果、須恵器胎土の地域特性はその地域の粘土の母岩の化学特性に関連することが推定された。

この結果を活用すると、窯跡の残っていない土師器や埴輪なども胎土分析によって、その産地を見当づけることができる。本報告では、仙台市周辺の窯跡出土須恵器を分析し、その結果を仙台市周辺の遺跡から出土した土器の胎土分析の結果に対応させて、その産地を推定した。

2. 分析方法

表1には、今回分析対象となった窯跡と遺跡、および土器種をまとめてある。資料は仙台市教育委員会、および仙台市有英高校の渡辺泰伸氏から提供された。資料は表面を研磨して、付着汚物、灰粉などを除去したのち、タングステンカーバイド製乳鉢（硬度9.5）で100～200メッシュ程度に粉砕した。粉末試料は10トンの圧力を加えてペレットに成形し、蛍光X線分析用試料とした。エネルギー分散型蛍光X線分析装置により、土器の蛍光X線スペクトルが測定された。土器中の成分として、Si（ケイ素）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Fe（鉄）、Rb（ルビジウム）、Sr（ストロンチウム）が定量された。定量分析には、標準試料として岩石標準試料JG-1が使用された。分析データは標準試料による規格化値で表示された。規格化値は次式によって求められた。

表1 分析対象となった遺跡名および土器種

遺 跡 名	土 器 種	出土、採年
大蔵寺窯跡	須恵器、瓦	1975、1981
五本松窯跡	瓦	1981
尾野窯跡	須 恵 器	1981
次橋窯跡	須 恵 器	1980、1981
吹付窯跡	須 恵 器	1981
古口遺跡	須 恵 器	1980
堂 崎 跡	須 恵 器	1981
大野田古墳	須 恵 器	1981
郡 山 遺 跡	須 恵 器	1981
下ノ内遺跡	須 恵 器	1981
南小泉遺跡	土師器、須恵器、中世陶器	1981
今泉城跡	中世陶器	1981

$$\bar{X} = \frac{(\text{実試料中のXの全カウント数})}{(\text{岩石標準試料JG-1中のXの全カウント数})}$$

Xは各々、Si、K、Ca、Fe、Rb、Srである。これらのうち、Siには殆んど地域差がなく、またKとRb、CaとSrの間には各々、正の相関関係があったので、これらのうちの2因子は不要である。結果として、地域の特性を表わす因子としてはRb、Sr、Feの3因子を選択した。とくに全国各地の400余基の窯跡から出土した約5000点の須恵器を分析した結果、Rb-Sr分布図が地域特性を表わすのに有効であることが分かったので、Rb-Sr分布図を採用した。

3. 分析結果

図1には大蓮寺窯跡出土の須恵器と瓦のRb-Sr分布図、およびFe量を示してある。Rb-Sr分布図上の中央に引かれた新座標軸は全国の窯跡出土須恵器のRb、Srの平均値である。窯跡出土須恵器の分析データはいずれもよくまとまって分布しており、同一窯跡でつくられた土器粘土は同質であることを示している。また、須恵器と瓦でも、同一窯跡でつくられたものは類似しており、本質的には同質の胎土であることが分かる。これらを全部含むようにして大蓮寺窯領域が決められた。

図1 大蓮寺窯跡出土瓦・須恵器のRb-Sr分布図とFe量

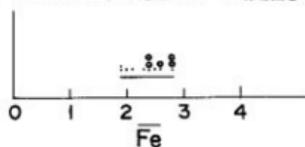


図2 仙台市五本松窯跡出土瓦のRb-Sr分布図とFe量

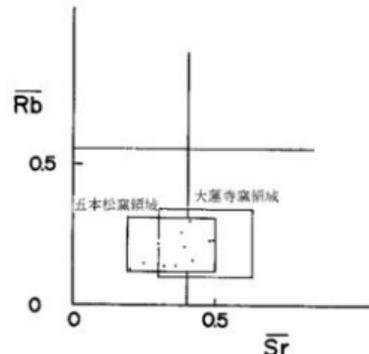
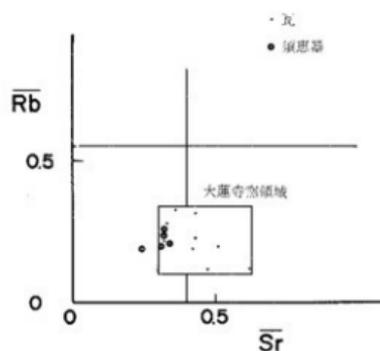
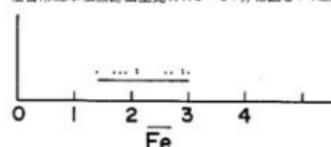


図3 仙台市堤町窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図とFe量

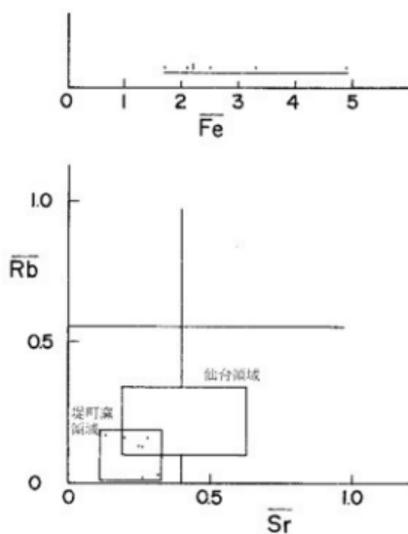


図5 大割村吹付窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図とFe量

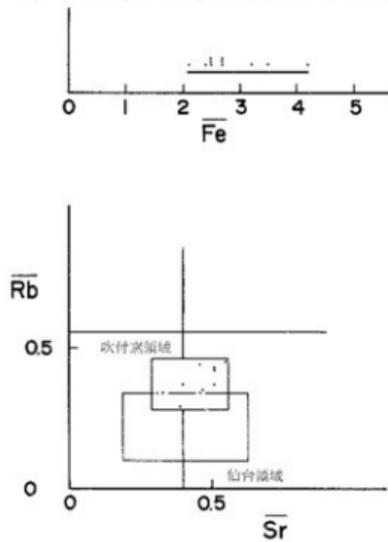


図4 松山町次橋1・2号窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図とFe量

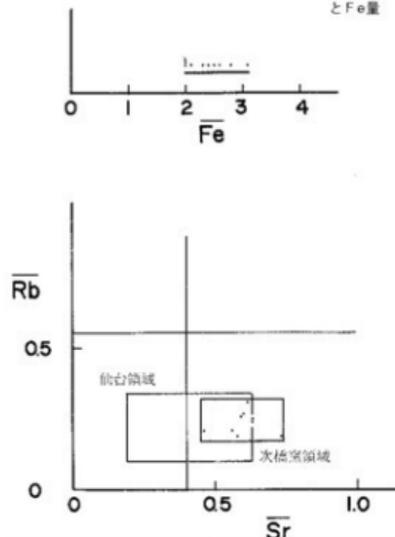


図6 仙台市内遺跡(堤町窯跡・山口・栗・大野田古墳・郡山下ノ内)出土須恵器のRb-Sr分布図とFe量

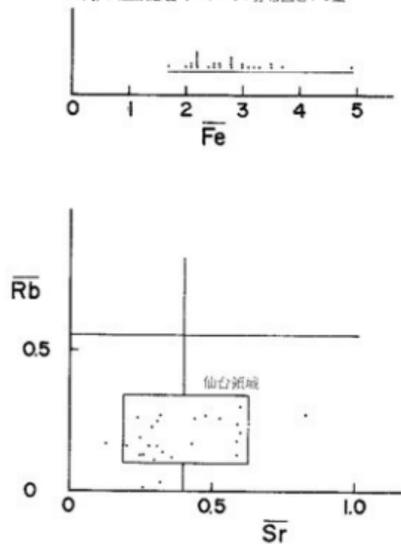


図2には、同じ仙台市内五本松窯跡出土瓦のRb-Sr分布図、およびFe量を示してある。同時に図1で求めた大蓮寺窯領域を示してあるが、五本松窯の瓦はほとんど大蓮寺窯領域に対応することが分かる。

図3には、仙台市堤町窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図を示してある。大蓮寺窯および五本松窯の須恵器と瓦を含むようにして決めた仙台領域にはほぼ対応することが分かる。

図4には、志田郡松山町次橋1、2号窯出土須恵器のRb-Sr分布図とFe量を示してある。図1、2で求めた大蓮寺窯、および五本松窯の須恵器、瓦を全部含むようにして仙台領域としてある。そうすると、次橋1、2号窯の須恵器の大半が仙台領域に入ることが分かる。したがって、仙台を中心としたかなり広い地域の土器胎土がRb-Sr分布図上で同じ特性を示すことが分かる。

図5には、黒川郡大衡村吹付窯跡出土須恵器のRb-Sr分布図とFe量を示してある。この窯跡の須恵器のRb量は仙台グループに比較して少し多く、仙台領域から少しずれることが分かる。したがって、吹付窯跡の須恵器は仙台グループから相互識別できる可能性をもつ。また、Fe量は図1から図5までを比較して分かるように、仙台を中心とする地域の窯間では殆んど差がないことも分かる。

次に、遺跡から出土する土器の胎土をみてみよう。図6には、仙台市内の6遺跡から出土し

図7 南小泉遺跡出土の土師器と須恵器のRb-Sr分布図とFe量

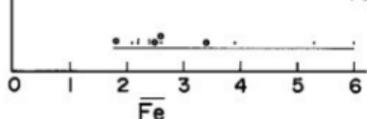


図8 今泉城跡出土中世陶器のRb-Sr分布図とFe量

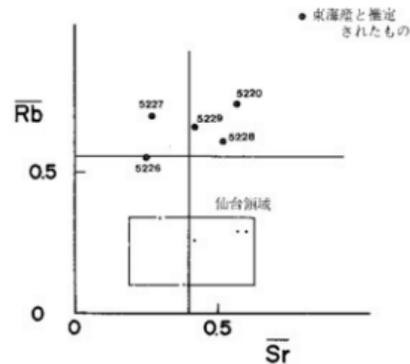
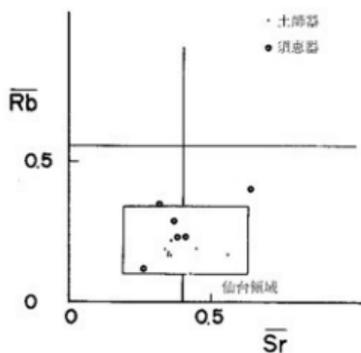
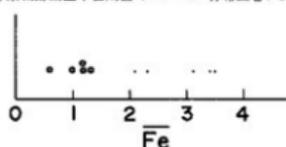
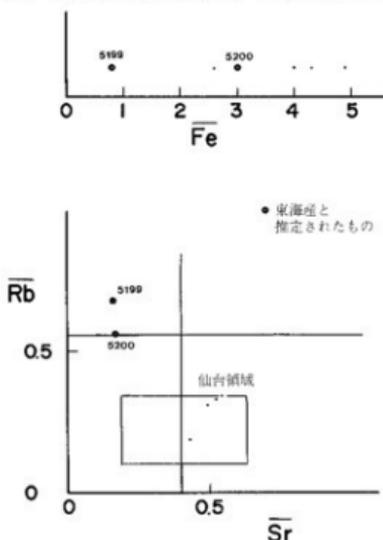


図9 南小泉遺跡出土中世陶器のRb—Sr分布図とFe量



た須恵器のRb—Sr分布、およびFe量を示してある。Rb—Sr分布図では全試料が仙台領域内、またはその近傍に分布し、これらの須恵器の産地が仙台市内、またはその周辺にあることを示唆している。

図7には、南小泉遺跡出土の土師器と須恵器のRb—Sr分布図とFe量を示してある。ここでも殆んどの試料は仙台領域内に入り、その産地が仙台周辺にあることを示す。土師器には、Fe量が著しく多いものがあるが、その理由はよくわからない。

図8には、仙台市今泉城跡出土の中世陶器の分析結果を示してある。10点の試料のうち、の半分は仙台領域内に入り、仙台周辺産の中世陶器であることを示している。一方、試料番号5220、5226、5227、5228、5229の5

点は完全に仙台領域外に逸脱して分布する。このことはFe量でも確かめられる。これらの試料のFe含有量は少なく、Fe量でも仙台領域に対応しない。したがって、これら5点の試料は県外からの搬入物と推定される。とくに、Rb量が全国平均より高いことは西日本型であることを示唆する。Rb量、およびFe量から岐阜、名古屋を中心とした東海地方がその産地と考えられた。岐阜、名古屋か常滑かは放射化分析によるNa量から推定できるので、次の機会にこれらの試料の放射化分析を行なう予定である。

図9には、南小泉遺跡出土の中世陶器の分析結果を示してある。ここでも、6点の試料のうち、4点は地元の仙台産の中世陶器である。しかし、試料番号5199と5200の2点は県外からの搬入物である。Rb—Sr分布図の分布位置より、岐阜、名古屋、知多、渥美の東海地方がその産地と推定される。

以上述べたように、今回分析した資料では、土師器、須恵器はことごとく地元産であったが、中世陶器にはかなりの率で東海産と推定されるものが検出された。

付2. 胎土分析結果について

胎土分析による土器の産地推定は、考古学的分析と重ねることによって成果を確実なものにすることができる。特に交易がさかんになった中世における陶器の移動を科学的に把握するためには有効な方法と考えられる。

今回、奈良教育大学の三辻利一氏に仙台市及びその周辺の窯跡、また市内の遺跡出土の瓦や土器を分析していただいた結果、土師器、須恵器は地元産、中世陶器には東海産と推定されるものも多いという意見をまとめていただいた。

そこで、今後、この分析結果をいかしていくために、所見を以下にまとめておきたい。

1. 仙台領域の決定には、大蓮寺窯領域と五本松窯領域を使用しているが、当然、堤町窯領域も念頭におく必要がある。また、氏が以前に分析している大蓮寺窯、金山窯、高沢窯出土遺物の分布も、^(註1)仙台領域の設定に関連させてよいものと思われる。

2. 図1の大蓮寺窯領域を見ると、須恵器の方が瓦と比べてSrが少ないようであるが、今後、仙台領域内でも区別できるものか検討を要する。これは、須恵器が5世紀後葉で、瓦が7世紀末に比定されることから、同じ地元産品で、同窯跡であっても、5世紀と7世紀では、粘土の採取地点を異にしていることを現わしているとも解釈できる。

3. 図6を見ると、仙台領域から比べてSrが極端に多いものは、郡山遺跡出土の須恵器の1片である。氏が現在まで行っている他地域の分析結果に照し合せても、当てはまる領域はないようである。仙台領域、大きくは陸前領域の分析資料の増加によって、今後、この1点を包含するような領域が設定できるようになるのか。たしかに、図4の松山町次橋窯領域を見ると、仙台領域に比べてSrの含有量が多い。郡山遺跡は窯跡でないで、その近隣からの土器の移動は当然考えられてよい。

4. 図7によると南小泉遺跡出土の須恵器と土師器も、若干、仙台領域外に飛び出しているものがある。これも分析量の増加で、仙台領域が拡大され、それに包含されるか、Rbが若干多いことを考慮すれば、図5の大衡村吹付窯領域に示されているように、陸前地方の他地域からの移動が考えられる。

5. 図8の今泉城跡出土の中世陶器の半分は東海産という推定がなされている。しかしながら、九州唐津の製品ではないかと思われるものがあり、放射化分析の結果がまたれる。特に資料番号5220、5228、5229の3点は、氏が行った分析では九州の領域に入っている。^(註2)

以上、所見を述べたが、残念ながら、報告書の刊行までに三辻氏と分析結果について、いろいろ検討ができなかった。今後、放射化分析結果がだされた折に再検討したいと思っている。

(註1) 三辻利一、児高玉貴ほか「元素分析による古代土器の産地推定の実例(2)」
奈良教育大学紀要第29巻第2号(自然科学)1980・11を参照。

(註2) 三辻利一「胎土分析による古代土器の産地推定」古文化談叢第7集(九州古文化研究会)1980・4を参照。

職 員 録

社会教育課

課長 永野 昌一
主 幹 早坂 泰一

文化財管理係

係長 大 沢 隆夫
主 事 山口 洋一
渡辺 洋一

文化財調査係

係長(兼) 坂 春 隆
教 諭 平 佐 邊 隆彦
。 渡 辺 藤 忠
。 加 藤 佐 止則
主 事 加 藤 田 城 浩
。 結 城 潮 一
教 諭 青 柳 木 隆 彦
主 事 藤 森 洋 幸
。 佐 藤 安 幸
。 佐 藤 調 幸
。 吉 岡 哲 平
。 渡 部 弘 尚
。 土 井 洪 光
。 長 寛 井 格
。 高 橋 勝 也
派遣職員 願 託 錦 木 実

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物霊屋下十ノイ化石林調査報告書(昭和39年4月)
第2集 仙台城(昭和42年3月)
第3集 仙台市燕沢菩提寺横穴古墳群調査報告書(昭和43年3月)
第4集 史跡陸奥國分石寺跡環境整備おびに調査報告書(昭和44年3月)
第5集 仙台市南小泉法蓮塚古墳調査報告書(昭和47年8月)
第6集 仙台市荒巻五木松家跡発掘調査報告書(昭和48年10月)
第7集 仙台市高沢渡町古墳発掘調査報告書(昭和49年3月)
第8集 仙台市向山堂岩山横穴群発掘調査報告書(昭和49年5月)
第9集 仙台市根津町宗神寺横穴群発掘調査報告書(昭和51年3月)
第10集 仙台市中田町安久東追跡発掘調査概報(昭和51年3月)
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報(昭和51年3月)
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報(昭和52年3月)
第13集 南小泉遺跡 範囲確認調査報告書一(昭和53年3月)
第14集 史跡遠見塚古墳(昭和53年度環境整備予備調査概報(昭和54年3月)
第15集 六反田遺跡発掘調査(第2、3次)のあらまし(昭和54年3月)
第16集 北尾倉遺跡(昭和54年3月)
第17集 柞江遺跡発掘調査報告書(昭和55年3月)
第18集 仙台市地下鉄開通分布調査報告書(昭和55年3月)
第19集 史跡遠見塚古墳(昭和54年度環境整備予備調査概報(昭和55年3月)
第20集 仙台市開発関係遺跡調査報告1(昭和55年3月)
第21集 経ヶ峯(昭和55年3月)
第22集 年報1(昭和55年3月)
第23集 今泉城跡発掘調査報告書(昭和55年8月)
第24集 三神平遺跡発掘調査報告書(昭和55年12月)
第25集 史跡遠見塚古墳(昭和55年度環境整備予備調査概報(昭和56年3月)
第26集 史跡陸奥國分石寺跡(昭和55年度発掘調査概報(昭和56年3月)
第27集 年報2(昭和56年3月)
第28集 郡山遺跡Ⅰ一昭和55年度発掘調査概報(昭和56年3月)
第29集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報(昭和56年3月)
第30集 仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ(昭和56年3月)
第31集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
第32集 山口遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
第33集 六反田遺跡発掘調査報告書(昭和56年12月)
第34集 南小泉遺跡都市計画部建設工事関係第1次調査報告(昭和57年3月)
第35集 北朝遺跡発掘調査報告書(昭和57年3月)
第36集 仙台平野の遺跡群Ⅰ 昭和56年度発掘調査報告書(昭和57年3月)
第37集 郡山遺跡Ⅱ 昭和56年度発掘調査概報(昭和57年3月)
第38集 燕沢遺跡発掘調査報告書(昭和57年3月)
第39集 仙台市燕沢鉄道開通関係発掘調査概報Ⅰ(昭和57年3月)
第40集 年報3(昭和57年3月)
第41集 郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査一(昭和57年3月)
第42集 栗遺跡(昭和57年8月)
第43集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書(昭和57年12月)
第44集 茂麻一茂高住七(旧)地造成工事地内遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
第45集 郡山遺跡Ⅲ一昭和57年度発掘調査概報(昭和58年3月)
第46集 仙台平野の遺跡群Ⅱ 昭和57年度発掘調査報告書一(昭和58年3月)
第47集 史跡遠見塚古墳(昭和57年度環境整備調査概報(昭和58年3月)
第48集 仙台市文化財分布調査報告Ⅰ(昭和58年3月)
第49集 岩切畑中遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
第50集 仙台市文化財分布地図(昭和58年3月)
第51集 南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第2次調査報告(昭和58年3月)

仙台市文化財調査報告書第52集

南 小 泉 遺 跡

昭和58年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 (株) 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL.63-1166

